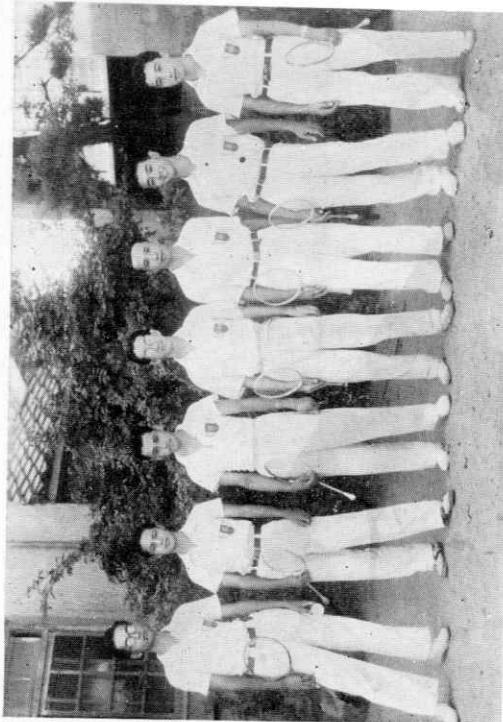


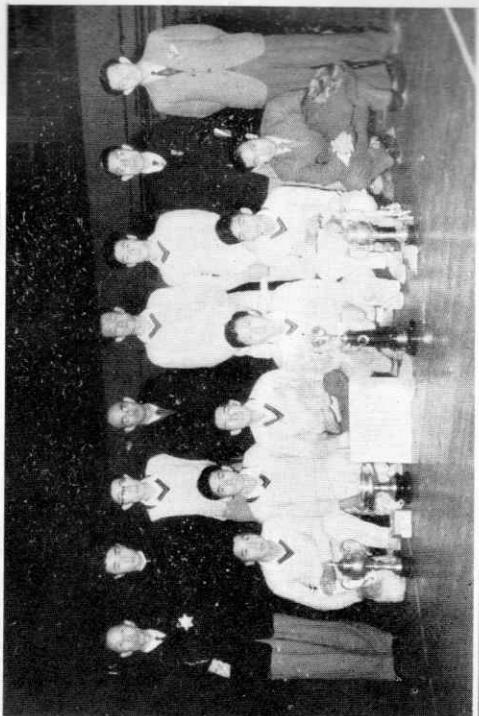
部 初 合 宿

於 新 潤
25 年 7 月



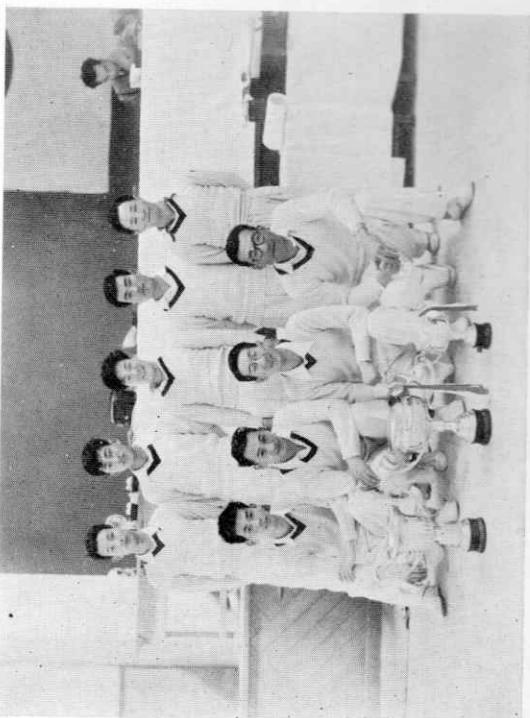
全 日 本 学 生 第二回

27 年 11 月 神 戸 王 子 体 育 館

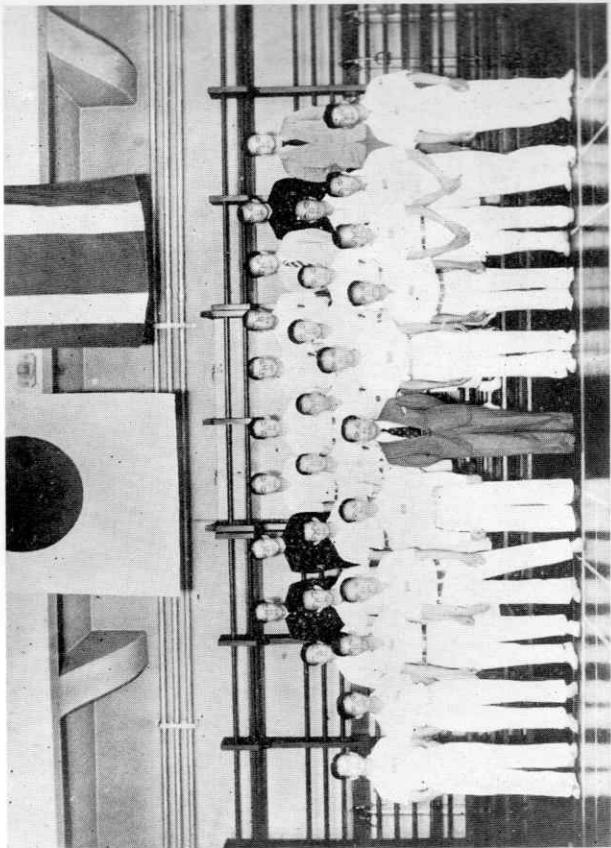


全 日 本 選 手 檜

28 年 5 月 於 新 潤



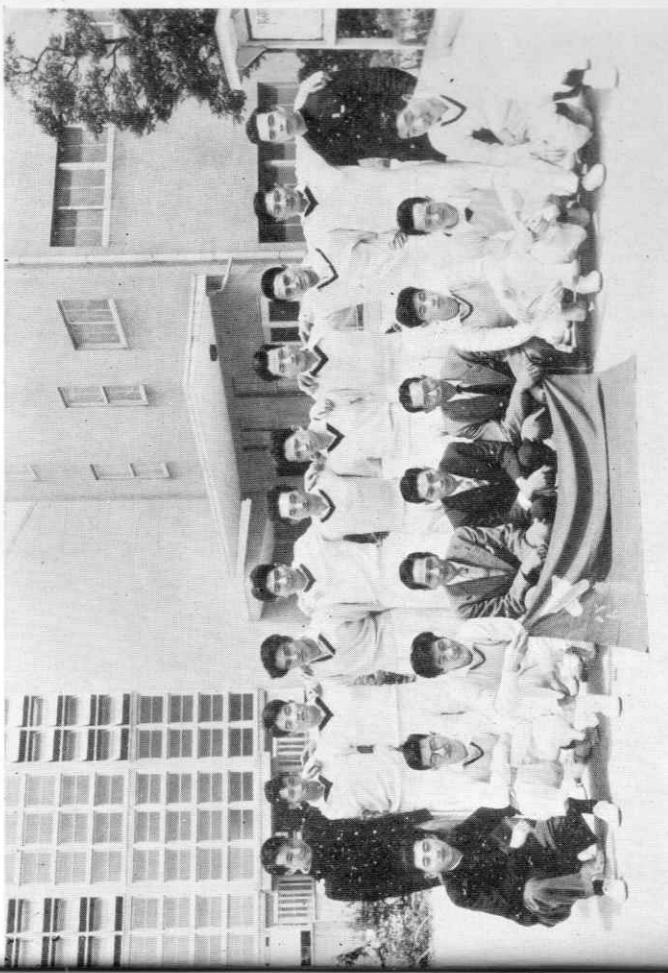
部 結 成 記 念 暁和17年10月 於 橫 滾 YMCA



對 タイ 留 日 学 生 軍 18年10月 於 東 京 YMCA

30.4. 於杉野体育馆

リ一グ戦



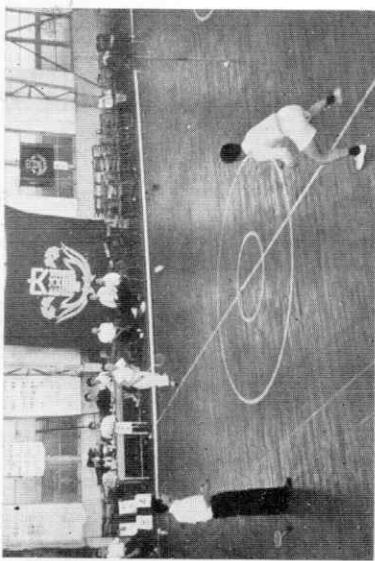
優勝記念 29.6.6 於天現寺



30.9. 於杉野体育馆

向側石田君

第三回慶早定期戦

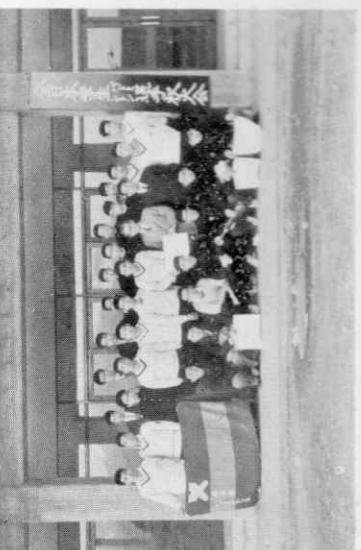


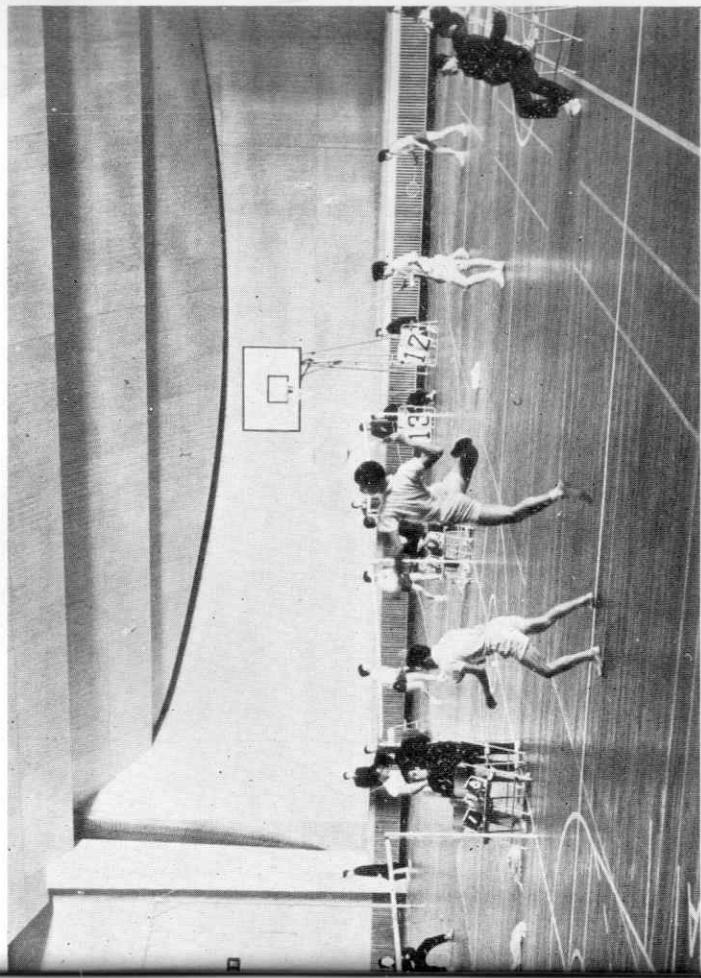
32. 11.

36.



36.





目次

創部二十周年記念を迎かえて	前 部長 白 石 孝 (二)
おもいであれこれ	三田バドミントンクラブ会長 奥 井 復 太 郎 (二)
こ も こ も	兵 藤 昌 彦 (さ)
創部二十年に際して	日本バドミントン協会理事長 森 友 徳 兵 衡 (さ)
た わ ご と	岡 道 明 (さ)
二 合 五 口	六 角 前 田 鑑 勘 (二)
学 生 時 代	大 塚 伊 二 夫 (三)
広 田 先輩から宮永君まで	吉 永 増 徳 (四)
	内 田 博 道 (四)
	石 田 博 道 (四)
	金 坂 俊 裕 (三)
	坂 俊 平 (七)

創部二十年に際して	吉	田	格	磨
合宿生活の想い出	鈴	木	嘉	明
部生活の想い出	岡	本	圭	三
私の秘密	楠	三郎	郎	四
学生時代日記雑感	牧	洋子	弘	五
部創立二十周年に思ふ	尾	関守	太	六
我々の時代の想い出	福	島竜	義	七
部生活雑感	小	杉良	雄	八
部創立二十周年に寄せて	松	田中	均	九
創部二十周年記念後記	山	武	一	十
あとがき	宮	永武	司	十一
	久安	米通	融	十二
	川	夫	大	十三

創部二十周年記念を迎かえて

部長　白石孝

ます、創部二十周年をむかえ、諸君と共に、部の発展を心より祝いたいと思う。

バドミントン部は体育会の中では戦後の新しい部の一つである。それだけに、部の発展をはかるためのO・B・学生の苦労も多いことであろう。殊に、慶應義塾でバドミントンをはじめ、クラブから体育会における一つの部にまでつくりあげた当時のO・B諸君の努力は、非凡なものであつたろうと推察している。そして、このバイオニアの時代から今日まで新しい伝統をつくりあげて来た人々の活躍も、吾々として忘れ難いものがある。これらのO・B諸君の努力は、ただ塾のバドミントン部の創設から発展に貢献しただけではなかつた。わが国におけるバドミントン界を刺激し、その育成と発展にも寄与するところがあつたといつても過言ではない。その意味では、部の二十周年をむかえて改めてかえりみる年月は、わが国のバドミントン界の発展史の一駒でもありはしないだらうか。

私が奥井部長の塾長就任にともなつてそのあとをうけて部長になつてから、もう数年になる。他の体育会の部に比して、数少いO・Bがつくりあげたこのバドミントン部が、学生スポーツの神髄を發揮して健全に発展してゆくのを、ただ見守る役目しかもたなかつたが、心では良い部の部長となつたと満足し、これまでの努力にむくいるところがあればと考えてきつとりである。しかし、塾がバド

ミントン界のバイオニアとしての役割を果した後、直面したのは他校の著しい技術の向上であり、競技は次第に苦しいものとなつた。私が部長に就任した時は、丁度その転換期にぶつかっていたかと思う。競技成績は、そのため逐年かんばしくなく、O・B諸君に切歯扼腕の思いをさせて来たことは、なんといつても残念である。

ここに、二十周年記念をむかえ、これまでの足跡をかえりみ、捲土重来を期する気魄をもつて技をみがき、部が一層健全に発展してゆくことを、共に期待してゆきたいと思う。

おもいで のあれこれ

奥井復太郎

時どいうものは永いものか、短いものか。わがバドミントン部が創立二十年ということでその憶出を乞われたが、この二十年、本当に永かったのか短かかったのか。

森友さんとはその在学時代、別のことでも知り合いであったが、バドミントン練習のため白金小学校(?)の体育館を借りたいがと、当時学生局(今で云えば学生部)に勤務していた私のところにそなあせんを求められた時にはじまる。私は子供の時から羽根つきが上手で、そのためか西洋版であ

るバドミントンには好意を持つことになつたとも云える。部長として関係するようになつたのは、その後か、葉山町、つまり私の近所に住んでいた当時の仲間君が口を切つたことからである。前記の好意、つまり私の主体的条件も整つてゐるので日々と承諾してしまつた事が今日になつて及んでゐるものなどである。あげくのはて、全日本学生連盟の会長にすら推され、それも今日まで水年にわたつてその席に留まつてゐる。

故に永いとも云えるし短かいとも云える。待望の体育会入籍も成就したが、その後、近來この大事な部の部勢振わぬことは、いささか淋しい。先輩や部員諸君が皆、一生懸命にやってくれているのだが、これが塾の学校としての性格によるものか、こんな始末に切歯扼腕こそしないが、何んと申しても意気大いにあがるとはまいらぬてゐる。

この年間を顧みるといろいろの事があった。幼稚舎の体育館を使わせてもらつていた。いろいろ文句もいいながらも、何んといつても本当に有難かつたと申上げる以外にない。日吉記念館が出来て、あのようにこの問題が解決するということは当時として到底予想が立てにくかつたから。

潮田塾長の頃に、大ホール再建の議があり、百年祭式場の事が話題に上つたが、その頃から私は、将来の学内行事の会場は数千人を容れる規模でなければ駄目と考え、更にそういう大建築となり、平素常に利用出来るということを考えるならば体育館的(屋内競技用)に設計する以外にないと思考して、体育館兼大講堂案を提唱した。幸いこの議が容れられて日吉記念館となつたのだが、それが為に、独特な設計を以て、現在ある型で誕生したわけである。「記念館」と名づけられて、体育館と呼

ばない理由もそこにあつたので私としては、ひそかにこれでバドミントン部の問題も片づくとホッとした次第であった。文字通り平素は屋内体育の殿堂であり乍ら、一朝事ある時には内外共に莊厳な記念堂として利用出来ることは何よりもうれしい事である。

人の事について云えば森友さんの監督時代からはじまる。「わが文遊録」に私の名を森友さんがのせてくれた為、諸方面から私とバドミントンとを結びつけてくれる事となつた。結びつけるといえば、大会の催される地方では三田会の先輩の方々に有力な応援をしていただいたのもたのしい思い出である。次に吹野さん、その時に前田さんが助監督だったり、そして岡君という順序だったかしら。私が関係していた頃活躍していた選手は藤井君、それに次いでか広田君、その頃から私も大分判って来はじめたということになる。インドネシアのイスマイリ君も現れた神戸での大会は印象的だった。

部の憶い出でなく選手権大会のことにもなるが神戸の大会で吉原と江井とが激戦をして、吉原君のケイレンで試合が一時中断したこと、京都では女子軍大いに振って多分三位か二位に上ったのはよかつたが、男子軍の声援が少々はげしすぎたらしいこと。その時がんばつたらしいだれぞ君の瀬も浮ぶ。この時は全体に試合が長びて、会長自身が閉会式をやれず、所定の夜行で帰京してしまったこと。東西対抗大阪の陣では出場メンバー変更のことで大いに揉め、それに腐ってか、東軍が大敗、立教の佐藤までがシングルで負れるという始末。

そう書いて来ると私自身もバドミントンには少なからず、変なまわりあわせがある。大阪では（東西対抗）体育館内の酷しい寒さのため発熱し、とう／＼列車にのるまでの数時間、大先輩T氏のお宅

にね込むという始末。このT氏それ以来もしたしくおつき合いながら、外宿なくならず。京都では丁度文部省の用で出張していたのと大会とが一緒に。たが、大学視察の仕事がきつかったので大会がはじまつた頃は旅先の宿で病臥中ということ。札幌では夏ではあつたが夜中冷えるのに一ヶ月をのみ過ぎたのがたたつてお腹をこわす……などどうも散々な始末。その度に皆さんに御迷惑をかけたことはかし。

でもこの部を通じて皆さんと親しくしているのは本当にうれしい。若い諸君の結婚式にまねかれて御慶び申し上げた事も少くないが、他の大学の方々のそれにまで御招きをうけるに及んだことなぞは塾のバドミントンのお蔭というより他にない。

と、ということで永い間皆さんと一緒にあつたことを改めてよろこぶ次第であります。

兵 藤 昌 彦

昭和十年頃、横浜YMCアーチンマーク基本体操クラスでは体操終了後、残った時間をバレーボール、バスケットボール、ハンドミントン等のゲームをして過していた。そのうち同好の士が集つて、ハンドミントン・クラスを設けて練習するようになつた。

昭和十三年四月、小生の友人から大阪の親類の者で山本孝二というものが塾に入つて、横浜のYMCアーチンのアパートに居るからよしく頼むと云われ、同君を探し、運動は何をやるかと尋ねたら何もやらないとの返事なので、学生時代の良い想い出として、Yに泊まっているのだしするから、ハンドミントンをおやりなさいと勧めた。一方、全時に北海道から塾に入り、同じアパート内の佐藤保君にもやるように勧めた。それから間もなく医学部一年の溝州国出身の春君が仲間に入ってきた。この人も同じアパートの住人、長身の好青年であった。塾の一年生三人が集つて楽しく練習した。斯くしていろいろうちに、アパート住人以外の塾生も加わつてきた。その一人に加賀君(旧姓仲地)がいる。現在、大阪に居られ、先年、神戸でのインカレの時には、遠路神戸まで毎日足をはこばれ大変御世話を下さつた。又、大阪で優勝祝賀会を催して下さる等種々御配慮いただいた。紙上を借りて御礼申し上げる。下阪の折りには御拌肩願つてある。

現役諸君、良い先輩ですぞ。

秋の某日、病院を抜け出して、東京山村町の喫茶店で前記の広田さんに藤井光男君(O·B)と小生の三人で日本協会の設立について相談した。

終戦直後の塾クラブの諸君はシャルトックが今日の様に充分なく、鶏の羽根を集めてつくる等大変苦労した様である。

終戦後、大学の制度が改められ、大学の必須科の一つとして体育(講義・実技)が加えられた。実技の選択種目には三十四種のスポーツがある。勿論この中にハンドミントンも含まれている。

当初、大学に体育館がないので、三田三十三番教室で、机を取り出してコート一面を作りネットを張つて、乱打、ゲームを行つた。此處は天井が低く、それに上から電燈が下つていて、ハイ・クリアが出来ず殆んどドリブン・フライト、ドロップ・ショットしか出来なかつた。学生数も少かつたので一応アレイする事が出来た。

次いで、幼稚舎の体育館を借用して行つた。コートは一面で、一面に約四十名、総数八十名前後の学生が参加した。アレイするより自分の番を待つてゐる時間の方が多い。中にはグラウンドに出て乱打するものもあつた。後に、午前の分、午後の分に分けて授業した。学生の方は半日で済むが指導を担当する側は午前八時より午後五時まで、一日八時間を十日間曜日なしの連続であつた。

ハンドミントンを選択する学生が多くなり、幼稚舎では実施する事が出来なくなつた。塾外の体育館を物色、幸い横浜の神奈川体育馆を全日、十日間借用する事が出来た。此處は、中央にコート

大阪に行かれた時には、是非御尋ね下さい。そして、現況をお聞かせ下さい。

喜んでくれますよ。

夏休みになると、大阪・神戸のYMCアーチンに遠征、(そのメンバーハは殆んど塾生であった)又、横浜YCCアーチンともよく練習ゲームを行つた。YMCアーチンで練習していた塾生諸君が、友人に呼びかけて出来たのが今日の体育会ハンドミントン部の前身慶應ハンドミントンクラブである。

学校でやるからには、先生方に理解していただこうと、クラブと共に三田山上の教員のクラブ・ハウス(現在大学院のある所)に伺い、照介旁々実演を二・三回いたしました。同所の庭、それから幼稚舎(現在の体育会本部前の広場)で、その時、寺尾、奥井、加田の諸先生方がアレートして下さつた。

昭和十八年十月八日、この日はYCAとゲームを行う予定であった。朝のニュースは第一次世界大戦に入った旨を報じた。試合は当然中止、張り切ったクラスの面々は残念がつたことであろう。翌年八月小生出征、外地で学徒出陣を聞いた。

終戦翌年六月病人として帰国、戸塚の国立病院に入院中、横浜YMCアーチンの広田兼敬さんが病氣見舞に見えた。自然と話は戦時の模様、Yのハンドミントンの様子等であった。

そして新しい協会作りの話を伺つた(戦前神奈川県に、横浜YMCアーチン、ナルトスボーツ、コロンビア、古河電線の四クラブに依つて協会が出来ていた。春秋二回リーグ戦等が行われていた。この協会は我国最初のものだろう。)

四月 周囲は充分広く、コート外で、常に机椅子が並んで、然しどン板一枚の屋根なので午後になると蒸風の間に座る学生、指導員共に非常に疲れだ。

斯くの如く、店舗の様に各所を二、三年間に亘りと借り歩いて廻つた。久しく待望していた記念館が出来て、学内で実施出来る様になつた事は部員と共に慶びに堪えない。

昨年までは、南北の硝子に面して三面の常設コートがおかれていた。実技の時にはこのコートの両側(バスケットボール・コート・器械体操場)に平行して、臨時に六面を抽き計九面で、約一八〇名の学生がアレートを行つた。硝子に面してアレートするので白いシャトルが硝子の中に入つて見えなくなる。それを見逃かすまいと見るので眼が疲れてたまらなかつた。実技の折りばかりではなく、部員の練習も同様に骨を痛めていた。

前々から希望していたコートの向き(東西)の変更が今春叶つた。練習が楽になつた上に、更に一面増加即ち四面になつたので今までより多く練習出来るようになつた事はこの上もない喜びである。又、実技の方もこれにならつて両側に四面窓計十二面、記念館一杯にコートが抽かれ、從来、練習するよりも他人のアレートを見つける時間が長かつたが、今年よりは一面約十名で練習するので休む暇がない位であった。この様に、十二分に出来る様にするために午前の分と午後の分の一部制にし、一部四時間で、残暑厳しい八月二十二日(三十一日の十日間実施した)。

他方、数年前より通信教育夏期スクーリングの際、通学生と同様に、体育実技の一種目としてハンドミントンが行われた。今年は

一〇〇名、一日二時間で、五日間であったが八月初旬の熱い時であった。夏期休暇中二面も、部員諸君に御手伝願っている。体育会各部とも同じ様にやつているとは云え、部員諸君の御苦勞に厚く御申し上げる。

先輩諸君

今年部の合宿は前記の如く記念館で行われた。若手のO・B諸兄が指導に見えたが、古いO・B諸君がお見えにならなかつた様に残念、老けこむのは早すぎる。自分から老年になるな、他の部のO・Bは熱心ですぞ、今春のリーグ戦の結果、御忘れてないと思います。責任を現役のみに帰することは出来ない。老舗に頼つてはだめだ。のれんに頼るな。

学生界否日本のバドミントン界をリードした塾、塾よりバドミントン、バドミントンより塾、長い黄金時代を想い出します。

再びその日の来るのを期待して止まない。

部員、O・B共に頑張れ。頑張れ。

体育会六十年史、(慶應義塾体育会発行) 参照あれたい

創部二十年に際して

日本バドミントン協会理事長

森友徳兵衛

茲に我が部創立一拾周年の佳日を迎へ慶賀に勝えない次第である。

に他の追跡を許さない成長身り代入した。續いて山本は専門的なオーバーを身につけ、昔しかるべきバドミントンに花やかさを添へ。今日我が部に残っているタイプを作り出した功績は大きい。特にジャンピングスマッシュを創始したのは彼であったと云う事を私は疑わないものである。仲地(現加賀)は学校の隣席が山本であった關係と住所が横浜であった為誘われて昭和十五年頃一人に半歳の遅れを以てバドミントンの魔となつた。定住で毎日練習の機会に恵まれている彼等と当然技術の差があつた事は無理ではなかつた。当時のYMは全員がバラバラと集つてはそれ適当にアレーを楽しんでいた所謂社交的バドミントンであつて、春秋大会等に親善大会を開いていたクラブであつた。

昭和十五年になると新入生として本塾医学部予科の寿尚嵩(満人)がYMCAのホステルに入り一緒に練習を始め、ひょろ長い身長と柔かい身体でアレーを活かしてすぐ上手になり仲地を抜いた様である。寿のアレーはO・Bの小宮兄弟によく似ている様に思ふ。彼はこの頃から佐藤仲地組、山本寿組が組んでYMCAでは単複共一、二位を占めて、広田兵藤両氏外のYM会員を凌駕した。

我私と諸君はこの辺りから出番になって来るのだが、一人共東京神田に住み席もモリとモロですと隣り合い、彼は本塾商工学校の卒業等色々な点で行動と共にし、最初は田園クラブの会員となつて硬式テニスをやつていた。私は十五年の終りに山本に誘われYMCAでラケットを握つたのである。私はその後暫くは本当に時たまで二ヶ月に一度位アレーをした程度のものであつた。最

頃みて昭和十七年バドミントンを志す者が集り日本バドミントン史を飾るに応はしい一事をなした事の意義が非常に大きいものを感じる。時移り人変れど一拾年の星霜を光輝と伝統に飾つて呉れた幾多の友人後繼者達の努力に改めて深い感謝の念を贈る。

慶應義塾体育会バドミントン部の創設時代即ち高天原時代とも云える昭和十四年・五年の頃については、現在在京の異友がないのでこの時代に触れるのは私の役目外ならないのである。本文が私中心の文体となる事を諒とされたい。

私は昭和十四年に本塾普通部を修え経済学部予科に進学し、一年E組の末席を汚したのであるが、同級生に山本孝二(現大阪)加賀(旧姓仲地)幹雄(現神戸)諸岡良幸(現鎌山)等の諸君が居た。又同時に佐藤保(現名寄)が居た事がひいては今日の日本のバドミントンがかくも大發展をなした原因となつた訳である。

佐藤は北海道札幌市北海中学(旧制)出身、山本は大阪市北野中学(旧制)出身であったから横浜YMCA内のホステルに下宿して学校に通つた。ここで彼等はその体育館で行われているバドミントンと云うのが見、且つ体育主事であつた広田兼敏氏(現日バ協副会長)や当時ソリストビヨロ勤務の塾員兵藤昌彦氏(現慶應大教授)からその基礎を指導されたのである。特に広田氏からはバドミントンルール、審判技術、用具関係等全てを学んだが佐藤が山本孝二より少々(数ヶ月か)早く門に入つた。勿論後年全日本成年選手権者となり、又一般男子の上位ランキングアレヤーとなつた佐藤は体質にも恵まれそのアレンワーカー、フットワーク、スマッシュの威力等當時として極めて短期間

にYMCAMでも出世した時に広田氏や兵藤氏と御相談を断つ事になつたのだが、その理由の一つとして私の祖父(父の弟)木村義則直郎副官をしていて、卒業後も横浜で實業局を其の傍でYMCAMで顧問をしていた關係で、当時は祖父は出世中であつたが、一度で慣れて戴いた事を覚えている。兵藤氏は創道館で祖父の一年後輩であり、之亦懇情を賜る事となつた次第である。

昭和十六年には諸岡が私と共に時たずYMに行く事になり一人はYMの会員となつた。この頃の私と諸岡はバドミントンが主であり、十六年十月学部へ進学すると共に田園クラブから柳葉の水口トヨテニスクラブの会員となつた。この田Yの人であつた四名の学生の方はYCA等と親善試合を行つたりしていたが、あく迄YMCAチームのメンバーとしてその時部合のよい者が適宜狩り集められて出来た様なチーム編成であった。広田主事は勿論頭頭で單複共元気で活躍され広田、兵藤組は最近迄仲々大したものであつた。

昭和十七年の春に、山本、仲地は慶應バドミントン部の創設の構想を初めて、私に相談があつた。この頃になるとテニスよりバドミントンに魅せられて育つていた私は一も二もなく賛成し、共に手を携へ諸岡も同志として協力する事となつた。問題はZo.1であり学部の違つてゐる佐藤の動向如何であつた。彼は巨に似合はず細かい神経の持主で(それ故にアレヤーとして大成した訳だが)趣旨として賛成するが横浜YMのメンバーを抜ける事はYのZo.1としての立場や今日迄の広田氏の恩義に背信するから嫌であると云う態度で煮え切らなかつた。山本の考えとしてはYとの縁を切つ

てスッキリとした部（当時は体育会員である管がないので、部の名前が伝えず原語クラブを使つたが、全ての考え方は今迄のYMCACやYCAC等のクラブ的でなく、もうろく部員を許さない方針で部として出発したのであつた。）にして本郷を干渉されない東京YMCAへ移そうと云うのであつた。併し之には広田氏との誤解や（広田氏もアレヤーなので相当な神経質である）反対を怖れ、日吉から三田へ通学が變つたから便利な東京へ、と云う段取で進んだ。勿論横浜Yや東京Yの選手として出る時は部の関係ない時にしようと云う約束であった。寿については丁度四谷に變る都合で、その事に拘らず横浜Yは懇親会して東京のホステルに變る機会であつたが、全面賛成であつた。彼には別に干渉とか我が部の自主性とか排他性とか（学生の今も変らぬ共通点であるが）はテンから関係がなかつた。現実に彼は横浜ではやれないものであつた。皆が東京で練習すれば彼にとつては頗つたり叶つたり云う訳であつた。佐藤の決心のため、かなり難渋したが山本、仲地以下下の面々は仮に佐藤が入部してくれなくても団体戦で当つて一番強いと思はれる横浜Yにも絶対に負けないと云う計画だけは立てた。山本・寿・仲地・森友・諸岡で勝てる訳なのである。併し佐藤・山本の間では次の様な法則が取決められて解決に到達した様だつた。即ち佐藤は東電部員たる以上、東電との対抗戦に對手側として出る訳には行かない。又横浜Yにも今迄世話をなつた関係上その対手側に廻る事も出来ない。

即ち慶応チームが横浜Yと試合する時の欠席し、Y軍にも入らない。その他は全て慶大部員であると云つたものである。私ども

東京YMCAの地下食堂で柳の辺で柳家に行われたが、この時集つた者は左の通りである。

佐藤、山本、仲地、寿、森友、諸岡、伊東（現日高）村上（現日産自動車宣伝課長）本田（東京ハッタ）花鳥（陸軍で空中戦々死）森友弟の十一名であつた。初代の主将には山本孝二が選ばれた。

この日から我が部に生命が与えられた訳で兵藤氏の骨折りで部長には経済学部教授（統計学）寺尾琢磨先生が就任して戴ける由で、私と山本の二人が池上の御宅を訪問した事を今のように思い出す。今は亡くなられた奥様が出て来られて大きな大が寝そべつている先生の書斎で御快諾と励ましの御言葉を戴いた時は本当に嬉しかつた。先般奥様の御悔みに吹野前監督と岡監督と三人でお訪ねしながら先生に対する御無沙汰御詫びの気持も含つていた。先生は御留守だったが、後御町重に私に御電話を下さつた。何時もきちんとした先生である。十一月中頃のよく晴れた日山本がナルトスポーツからテラアラインを借りて来て今の南側校舎の下（当時商工学校の運動場で私が幼稚舎生の時の幼稚舎運動場に張つた。縄のテープでコートをでこめた云はゞ組立式のもので畠の様な針で地面に止めた。前以て大先生方に、午休みに来て下さいとお願いしておいたので、教授連が歩を運んで打ち興じて下さつた。寺尾先生の御努力だつたと思う。奥井前部長、小泉、潮田と歴代の塾長方が面白がつて打つて下さつた。翌週も教員食堂の脇の芝生でテープを張つた。同じメンバーの先生方がアレードされた。奥井、小泉両先生はお上手で我が部長はうまいと云う訳に行かず

しては佐藤も學生として我部の為に同一行動するべきであると強硬に山本に対し主張し、結局結果的にはその様に落つた事は音便らしい事であつた。山本や私の考え方はYから離れる事が發展であり前述であつたのであり、佐藤は浪花節があつたのであろう。後から考えれば誠に若かつたと云う事だろうが勿論広田氏は腹の小さい人ではなく結成後の佐藤以下のメンツに何くれども面倒を見懶かい氣持で日本のバドミントンの為に育てて貢つたので、部の創設に學校關係をかけ廻つて戴いた兵藤氏を生みの親とするならば、技術や行動に力を貸して戴いた広田氏は育ての親であると云う事が云えるのである。後年広田氏の長男敏秀氏を終戦後我が部不滅の名アレヤーとして迎える事になつたのである。

結果から見ればこの様にどうと云う事はないのだが、本当にその当時としては佐藤含めて我々の憶測は、佐藤・山本・寿・仲地の主力四名が分離した後の横浜YMの戦力低下についても心配したものであつた。

その夏が終つて十月に我々は学部一年に進級した。戦時体制下で軍事教練の盛であつた頃である。山本の手によって他の部の部則を参考にし、慶大バドミントン部（慶大鳥球クラブ）――KB-C（体育会入会と共に奥井部長の手によりKB-Aと改称した）部則がまとまつた。當時バドミントンの和訳に羽球と島球と二つがあつたが、我々は會議で鳥球の文字を使用した。語呂がよくて、又空飛ぶ白鳥を獵銃で撃つのを模したバドミントンの実体をよく表しているからであつた。

エース佐藤の決心も前述の通り定まつたので十月七日の三時に

皆で車に乗り集合したの用事から仲の川柳助の仲介で仲間に山本、仲地、寿、森友、諸岡、伊東（現日高）村上（現日産自動車宣伝課長）本田（東京ハッタ）花鳥（陸軍で空中戦々死）森友弟の十一名であつた。

東京YMCAに肩を附えての事となるが、柳山（代前）には柳山体育主事と本田主将が居て、広田氏の奸意ある紹介で我が部の集團入会を快く迎えてくれた。本田氏（鶴岡人）はバドミントンについての知識を一日も早く吸収したい様であつて、コートゲートを私の申入れ通り正確に慣色いペイントで一面、格闘をして引いてくれた。これこそ東京都に一番最初に引かれた正式のバドミントンコートである。

「註この点につき三七、五、九、日本経済新聞『交遊抄』に拙文が出た時、幼稚舎体操の先生であった原六郎氏より御便りを戴いた。それによると幼稚舎体育館落成記念に故平沼亮三氏がバドミントン用具一式を幼稚舎に寄贈し、ライオンを引いて平沼、小泉組対原、故宇都宮（私の教わった体操の先生）組がゲームをした事である。私の普通部一年の秋に出来た校舎だから昭和十二年である。コートゲートは何によつたか不明だが興味深いと共に前述の小泉先生の名アレード振りも成る程どうなづけるものがある」

東京YMは早速バドミントンのタイムを一週間に一回一時間づつ夜間に組んでくれた。且私達はその技術をYの会員に対し職員を含めて「イヤな顔をしないで」と教えてくれる様要求された。勿論嫌どころか、我々は普及の為に我々の練習の外は指導に当る事を快諾した。

当時も一般の人々が皆ラケットを持ちながら打ち興じたが試合の

為と云う程の練習をする人は居ず、幸いな事に私の次第に上達して来たフレーを破る人が出て来なかつた。我々は月水金を練習日に定めバドミントンの時間は一面を、他の時間は一面を張つて練習し、又甚でも他の時間で空いている限り一面のみは勝手に張つて使つた。職員は好意を持って見ぬふりをしてくれ、他競技はバスケット等半面で練習していく呉れた。それでもバスケットの時間にはバスケの人達が我々に空けてくれる様丁重に頼んで來た。この様な時は当然我々はすぐネットを外した。全体に今のスポーツマンに比して紳士で（余裕のある人のみがやつていたせいかもしない）戦前ロッカーに入れ放しにしてあつた運動靴（當時は貴重品である）が戦後そのままあつた（使えなかつた）程で、その邊に置き忘れた物等は決して何日経つてもなくなるとは想像もしなかつた位であつた。この点今の人達は歎わしいと思う。

戦争中なのでスポーツの利用度が低かつたにせよ我々をバドの先生乃至指導員として扱つてくれて、「お願いします教えて下さい」「有がどうございました」ときらんとしている彼等スポーツマンビYの職員達皆の好意を忘れる事は出来ない。本田さんは現在僅さんと称され六月四日初めて協会から韓国に遠征軍を出す現在協力すると云う電話を戴いている。

私は十月に新入部員募集のポスターをポスタークリアで作成し弟の居る日吉へ出かけ第一食堂の壁へ二人で貼つた。カベ色地に黒でネットにその向う側にフレイアを影に潰して書いたものである。又コンパスを使って三色の横の両側に羽の折つた部章も私が作成した。金などにかして作成して部員は全部それを費用した。

医学部の一年生で四年に通つた私は専門に所長のアシスタント練習をした。一人だけの日があつた。外には勝つ事もあつたし、山本と練習した時ゲームを取つた事もあつた。アメをくれたのかも知れない。佐藤とは殆ど練習出来なかつた。試合の日に顔を合せる位で、定期練習には来なかつた。事情があつたのである。佐藤には勝つ機会がなかつたにせよ格段の差がある。

昭和十八年六月十三日（日）YCA C（横浜外人クラブ）と対戦し八一で快勝した。単六複三で次の通りである。六月十五日（火）ニッポンタイムスの記事）記事中佐藤キャプテンとあるのは21の意味かと思う。

仲地は出なかつた。又諸岡がセッティングを十四オールでやつしているが、二点が本当で十七・十四の間違いかと思う。

この勝利は私と諸岡の復を落したのみで勝つたが、大いに自信を深めたものである。シード順なので強い所は佐藤、山本が潰してくれた。私は2.3シングルと2.3ダブルスで出た訳である。この企画は山本が横浜で全部やつてくれた。

次に私はタイ国の留学生が試合をしたいと云う申し込みがあると云うので勇躍してその計画に入った。当時の用具の点については勿論スチールシャフト以前のナルト製全木製（戦後も随分使われた）ラケット及び羽根を使用し、出征直前の頃ナルトの新製品竹製ラケットを使つた。ガットは牛のセミシニア或は鶴筋やシルクを使つたが、シルクは好みなかつた。横浜YMC Aに行くと広田氏がRSJ等のつておきの外国品を使わせてくれた事を覚えている。中には黒羽根の感じの良いものを出してもらつた。

部員の入部申込はポスターを見て弟の所へ出た。六角勉（現むすみ）榎本延二郎（戦死）で予科一年生であった。六角は浅野綜合中学（旧制）出て熱心な部員となり戦後直ちに弟と部を復活し、新入生を仕込み、昭和二十一年に弟が卒業の後幾多の名選手を養成して、各大学に普及、関東学連を結成し初代の委員長となり卒業後日本バドミントン協会常務理事として全日本学連の創設、第一回インターカレッジ（横浜市）の開催と華々しくバドミントン界に貢献し、藤井、広田の名手の良きリーダーとして我が部史に残る人である。戦前六角榎本のペアが入つた時東京Yで最も良く走り廻つて上達したのは六角であつた。私は家がYの近くなので、六角氏は私が手をとつて仕込んだつもりで、いわばマナ弟子だと思っている。勿論戦後彼は大いに技術を伸ばし当時の事はほんの手ほどき位しか役に立たなかつたろうが、ネットプレー、スマッシュ、バックハンドと彼はよく走り廻つて努力を重ねたものである。外の者ではこの新しいスポーツに彼程走り廻されたならば嫌になつて去つて行つたに違ひないと思う。彼が乗り越えてくれなければ戦後の学生バドミントンの興隆は大部テンポが変わっていだに違ひない。

二人の外に星、折田、吹野氏等が入部した。私もこの頃になると覚え初めに負けた横浜Yの人勝つ様になつた。中国人の寧寧（にん）さんや韓国人で法大生だった松浦さんにも問題なく勝つ事が出来た。

当時十月が学生の切り替えであつたので昭和十七年十月から私は学部二年、弟は予科三年、寿君は東京Yへホステルを代えて

ナイトの間も我和田さんにはいつもアーティストとして横浜に松浦や和田に在り又バドミントン界隈もこの方面で豊富な受けた大功勞者であったこと記憶しておかねばならない。

現タイ国のウチエンヒウチヤイ、アラナスリ馬場七郎ソマイ、ファンタラクーンなど何かとカワカーンとかの顔つきは何れも東大や早大の留学生で、或いは卒業後帰国した人となるため農林省や商工省（通産省）に派遣されている若者で、リサロチ歩きの頃からバドミントンをやつている人たちであった。

この試合は私は本当に勝つ自信は殆んど無かつたと云えるが、知らぬ者の強さで「どんどん」と行こうと云う事になつて、私がアラナスリ兄と新橋の第一ホテルのロビーで待合せ交渉に入つた。会場は東京YMC Aが本田さんの肝入りで日泰両国の国旗を掲げて力を入れてくれた。主審にはYCA Cの時と同様安井哲永（韓国人）、副審には松浦氏や本田氏が当つてくれることになつた。私の方は当然六单三複で対戦する事を疑がわなかつたが意外や五单五複との申し出なので驚いた。私の方は何れも6-3でやつて來たのでその他は考えられないと申し、相手はダブルス中心だから一歩も譲れぬとアフヤ話はこれそぞになつた。止むをえない私は同点になつたら困るからと云つてやつと6单5複で相手と一致したのであつた。当分は山本主将と相談して6-3のつもりで行こうぜと云い鬼に角、複の二チームを編成する事になつた。

主審は佐藤、山本、寿、仲地、私、六角、副審は佐藤・仲地、山本・寿、森友・諸岡、伊東・村上、本田・花鳥の堂々たるシードで

対戦する事となり、別掲写真で判るように、私の弟や橋本、新田津川等が出席していた。

このスコアは私の手許に残けて了つてないのだが、当時の毎日新聞に出ている筈である。

六角のNo.5起用については山本と私で苦慮した処であつたが、最近メキメキ強い六角の奮起を促したかったのであつた。これが結局に於いて失敗のモトであった。矢張りベテランの諸岡を出せばよかつたのかもしれない。六角は単で諸岡より強かつたのが原因だったが新人だったのでドキドキの大あがり。森友さん脈を見て下さいよ」と云うので触つてビックリ、タッタツタッタッと云う調子でこりやいかんと思つたが運くストレートで負けて了つた。No.5で私が出てストレートで一点を取返した時は山本以下大喜びであった。私も続いて負けると想像していた有様だった。私はトスでシャンケンした時チヨキを出した相手の指がアルブル震えているのを見て「勝った」と思つたのを覚えている。この一点が正式国際試合での我が最初の一点だったことを私は常に誇っている。正式なチーム（クラブではない）が一国編成の外国と国旗を前に対戦した記録はそれ迄にないからである。喜んだ慶應は仲地、寿、山本、佐藤とぶっこ抜き五点をあげ五ーと単でキマリであったからタイには勝つたと云つて構わないと思う。（複の始ぬの一試合はオーフンと云う事になる）トマス杯でもアジア大会でも複五単六の比準の試合はないし、むしろ複の方が少い比率である。寿か山本の何れかがフルゲーム（当時はセットと云い、フレームショットはオールではなかつた。）だつたと思う。我

私は学校で顔を作られた。「八九九九勝つたんだ」「八九九九川は失敗か」『』（アーヴィングは耳打た）事の顛から「リメンバードアルスが舌言葉となつた。之はハルハーバー奇襲によりアメリカが「リメンバーハルハーバー」を行方難にして日本艦隊のストーカンにしていることをもじつたのである。

この日泰戦（慶泰戦）が九月頃だつたと思う。我々はせん息なつた山本を残して十八年の十二月一日に、十月から最高学年であった私は学部三年を仮卒業して皆兵隊になつた。海軍に行つた諸岡、村山、本田等は十二月七日でこの一週間の差をひがんだものだつた。

二十年八月終戦となり陸も海も皆元将校として帰つてきた。弟は經理部の特任幹で、六角は花島の後をとつて陸軍飛行操縦見習士官であった。花島、橋本は永久に帰つて来なかつた。

戰争中の十九年十月に私は陸軍經理学校に於て慶大の卒業証書を授与された。我々の級は從つて、戰後そのまま就職したが、弟は三年、六角は一年（何れも旧制）に在学した。

六角は弟の言葉によれば我る日（二十年の十一月頃）学校で会つて「森友さん『バドミントン』をやりましょう『バドミントン』をやりましょう。」と云つたそうで、弟から私に相談があつた。十月一日から今所に入社していた私は、広田さんを頼つて相談に行けと云つた。これが復部のきっかけで、学生二人は広田氏を訪ね、万般の応援を得て平楽小学校を借りて廻つた。幼稚舎は仲々うるさくて貸した覚えなかつたからである。二人の努力で新入部員が入つてきた。奥野有志磨や三鷹公夫もその内で、吹野

々はニヤニヤのしつ放して、小休の時私の相手が私の経験年数を聞いて驚いていた。

あと一ヶ月で勝つたのだからNo.1からNo.2のダブルスどちらか是最悪の場合でもとれるだろうと思ったのは從来の経験から無理のない線で、複が始つてバタバタ負け出してからの事であつた。私と諸岡の単の相手が入つて相手ダブルスに一五一、一五一一で手も足も出すに負けた。単で負かした奴がこんなに上手だったのかしらと冷汗三斗——もう一度単をやつたら負けたかも知れない。負けなかつたにしても複の強さは絶倫であった。五一三となつて山本組出場フルゲームで負けた。併し我々は日本一の佐藤仲地が居ると云う事が頼みであった。この相手はグラナスリ兄弟で弟は早大の学生であったので興奮はモノに上つていた。兄貴は東大出の様であった。ゲームは一一の後十三オーチのセッティング、然も四一四となつて両チーム全力のある限りを傾注し、サトアは四人の間を全てのマッチ・ポイントを賭けて三回も廻つた。その間の我々——今こそ勝つたと思い、あゝ駄目だと思い、又歎嘆の期待にたくらんだ。主審安井氏は現に椅子の上に立ち上つて必死の審判——大変な事態となつた。このジャッジに全精力を注いだ。

かくて佐藤の巨体が横倒しに飛び仲地の細い身体が反対に倒れ、暫くは大喰声の中を動けなかつた。この試合は写真で判る様に素勲の領事が来て終りまで一心に観戦した。相手もスマッシュして決めた瞬間に一人ともコトに倒れ、興奮は極度を超えていた。

私は学校で顔を作られた。「八九九九勝つたんだ」「八九九九川は失敗か」『』（アーヴィングは耳打た）事の顛から「リメンバードアルスが舌言葉となつた。之はハルハーバー奇襲によりアメリカが「リメンバーハルハーバー」を行方難にして日本艦隊のストーカンにしていることをもじつたのである。

藤井の進境は初代監督となつた仲地と六角主将の仕込みで著しく浜松町の工業奨励館等、折柄外地引上げの人々宮次氏（日本スポーツ新聞主幹初代日本バドミントン協会理事長）因みに私は五代目である。や今村氏等の応援でメキメキ腕を上げ、仲地、六角、藤井と三者同等の強さとなつた。前述の通り六角の岡東学連（最初三校、直ぐ四校になった）初代委員長を繼ぎ、六角卒業の後生れた全日本学連の初代委員長となり、我々O・Bを助けて凡ゆる普及指導に惜しみなくその技術を披露した功績は大なるものがある。藤井時代に前田、小宮、広田が入学し、ここに第一期慶應金時代が作り出された。仲地が加賀となつて大阪へ去つた時昭和二十四年四月から私が学生に選ばれて二代目の監督となつた。藤井が主将の時、中沢、前田、広田、朝倉と四ヶ年勤め神田の佐久間小学校時代（寺尾先生が岡東学連会長）を経験して岡主将の前の昭和二十八年十一月に吹野君にバトンを渡した。

昭和二十五年七月に新潟県協会の招きで我が部初めての遠征指導合宿を行つた。藤井（主）小宮兄外は三校、朝倉、内田、磯見の一年生を教育の為に連れて四日間講習會と対戦を行つて帰る

つた。尚これは当時の我が部の半分で残組には広田、前田、戸田、高見、中沢、斎藤（孝）等ソクソク居て我が部の厚さを誇つたものである。

昭和二十六年前田主将の時晴れて宿題の体育会に入会が達成した。從来の戦績を認めて賞つたのだが、この年の五月、私の結婚す前に我が部初めてのダンスパーティを目黒の雅樂園ボトルルームで開き大成功であった。創部十年体育会入会記念を銘打つて、バンドの途中で私が来客に記念の挨拶をした。

昭和二十七年広田主将の時、今のユニフォームを制定し、ソックスも揃えたが、ソックスはすぐ縮んでしまって使えなくなつた。マーカーは私のアイデアを尊重して永く部員が使ってくれていた。慶応コールは広田主将の時神戸のインカレで対立大団体決勝戦で初めて使用し立大勢をボカンさせた。勿論合宿の時から練習していたのである。このインカレ決勝は私にとって思い出が深い。高見副将の活躍も見逃せないが、岡の奮戦により立大服部を下した功績は大きい。新人吉原は個人戦で江井（当時関東学院一年生で後輩に入り主将を勤めた）にひねられて足のケイレンを引起し、その為一日間休養させて最終日北大（神山主将）との準決から使つた。玉越立大主将との単は玉越君の穴をつかせる策戦で戦前から勝目があつた。

彼のアルアル両足に巻いたはうたいが印象的であった。広田が個人戦決勝で立大佐藤に勝つたが左足首を捻挫して団体戦は岡、広田の複のみびっこを引き引き勝ち進み、単はラストに置き、全て出場せずに単一で勝負を決めた。立教は広田の故障に気が付

くは立大のアイトに驚いて立大勝を運んで、立外の三位をあつた。五月の新潟全日本は私もカリカリとしていたので食費張り切り、この年の成年单は北海道佐藤O・B、一勝り予想は広田新O・B同三位は藤井昂一（現役）同様は吉原、藤丸、三位は岡石田とズラリピックアップを揃え大いにバドミントンKEIOの邵政を下げた。

この記念の写真と、前の神戸インカレ三連覇の写真を別掲とする。

幸のウラに不幸がある。春のリーグの不覚を徹底的に叩こうとした私にとつて藤井昂一の体育会診断は正に鉄砲であった。彼は二年の休部（二年の休学）を余儀なくされたが、私は粒の良い手駒があり、秋には絶対勝てる自信があつた。だが試練は尚我が部に襲いかかったのである。石田が肩を抜いた。朝倉主将が盲腸になつた。この三発が効けばどんなチームでも優勝は墨めないであろう。朝倉には代理主将として内田副将を用意したが、幸い手術には佐藤、山崎、新倉、望月、力石、金井が集つた。来年の片石が入り、伏鳥、野島、越川が入る日を待たねばならないと思つた。十一月の仙台インカレは正にこのポイントである。「三軍二復は岡、吉原、小宮（弟）でやれる」とその事を考えたが、実際は仙台には藤井光男と代理監督として出さなければならなくなつ

かない（ひつこは三味縁と思つた）で、佐藤一広田が単三となつてがっかりしていただけだった。ホーリー佐藤が必ず個人戦の様に広田に潰されると思った様だった。慶大は誰と当つても負けると云う広田をラストに置き、不敵で勝つためには佐藤がラストになるより外に道はなく、この予想は当つた。佐藤は広田の故障を見抜き二一二となれば勝つと予測した只一人の男だったろう。岡・吉原の出し方については服部玉腰の出方一つで佐藤はラストと信じていたので、負傷の吉原は服部の敵ではなく、岡が服部の潰し役であった。会場の外で広田と一人腰を下し二〇分位迷った尋句「監督さん決めて下さい」と云う広田の言葉で、ホーリー岡のトップが決つた。逆に当つたらば、と思うとソッとするが、二一二になれば広田の事だから這い廻つても佐藤に勝つたかもしれないと言ふ氣もする。これでインカレは、初回以来藤井（横浜）前田（東京）広田（神戸）と三連覇した。奥井部長（学連会長）が観戦されインドネシアから貿易商として丁度来日していた元部員で小宮（兄）のバートナイスマエル君も応援に来た。

このインカレの開幕前日に第一回の東西学生対抗が単十複五で行われ、東軍監督を私、西軍監督を加賀（旧姓仲地）が勤め、主将は東広田、西大圖（岡学）君であつた。確か十二一位で勝つたと思う。法政は五十嵐、藤川君、明治は鈴木（峻）、萩原（誠）君等が居た。この大会から早大が津田主将の下にインカレに参加した。

昭和二十八年朝倉主将の時石田、藤井（昂）の両新鋭が入学し玉腰をして「又慶応さんか」と嘆かせ彼は卒業して行つたがその

とき山口平蔵（山崎）が藤井玉腰の事で嘆いて「又」と云つた。

西野君は一代目の監督として西野君を助監督として、昭和十九年岡主将小宮（東）副将などがダーティ耕耘で東大のリーグ戦を優勝で飾つた。春のリーグで立敷に勝つたり、船出山やうになつて困つた。この年は片石入学は失敗したが、堀川、大井が入学し活躍したのだが何といつても気分を一新して優勝に導いた監督の功績が大きい。

部長先生に就いては前述通り戦前は寺尾先生が就任して戴き予科は医学部の森安正先生が副部長になって戴いてゆく六角が予科生の折、大変御世話になった。

戦後矢張り兵藤氏の御骨折りで奥井先生が二代目の部長として御引受け下さって歓迎、先生が掌長の要職に就かれるのを機会に現部長の白石先生に移つた。

奥井先生は戦前バドミントンの御経験が有り御上手であることは前に記した通りであるが私の弟が一人先生の御子息と同級であったので私の姓は先生の御記憶にあつた様である。先生の御尽力で体育会に入会出来た事は云うまでもないが、昭和二十二年に現役に対する必要から我々でO・B会三田バドミントンクラブを発足させた時O・B会の会長を兼任して載つた。先生の渡米期間があり。その岡石丸先生と氣賀先生に代理部長を御務め願つた。奥井先生は初代学連会長として今日まで学連の父として連盟発展に寄与されて居られる事は周知である。塾長になられて部長をする事が出来ないという理由で白石先生と交代されたのだが、我々が

たって御願いして掌運会長と二田クラブ会長（この時から二田クラブは会長、部長白石先生委員長松）に御留任願った。私がのになつた時委員長を吹野君と交替した。奥井先生の時の副部長に高校の川上先生、現在は奥野先生をわざわざして居る。奥井先生の時女子に力を入れる様御指示があり、女子高橋（現、上杉夫人）佐藤（現、片石夫人）藤林（現、牧夫人）を擁してイシカレ初優勝を成し遂げた事は記憶に新たな所である。

私の監督就任当時は東京都バドミントン協会の理事長と日本バドミントン協会の常務理事を務めていたので三本立であつたが矛盾を生じるので、協会の方を両方共辞任し学校一本でやつて來た。從つて吹野君と交替した一八年暮から再度東京都の理事長に引出された。昭和二十一年四月迄はO・B会の方だけで暫くの間私が何にもバドミントン界の役に立たなかつた期間を過ごしたものである。（昭和十九年春）

（三七・五・三〇）

でもあります。

故に、塾バドミントン部の誇りは、日本の誇りなど考えて辯進していただきたい。又、井の中の蛙になることなく、広いビジョンで練習をして、試合に臨んで欲しいのであります。最近は他校の技量も充実している時、大いに奮起してもらいたい。

何も伝統だけにこだわることなく、伝統にアラスされた新しいテクニックを大いに採用して、且つ生み出して、名実ともに塾バドミントン道ここにあり！と我が國のバドミントン界に新風を送つていただきたいのであります。諸先輩方が苦労した頃に比べると、設備といい、色々な諸条件が整つてゐる現在だから、やろう！と思えばやれる筈です。諸先輩の築いた土台に、りっぱな柱や支えを建てて欲しいのです。そのためには、出来る範囲で、O・B百人余の皆さんへ、惜しみなく協力するでしょう。

塾バドミントン部に、いや日本のバドミントン界に新しい歴史の一ページを送つて欲しい。（昭和三十年度卒業）

明道園

今年で創立二十周年を迎えた、塾バドミントン部。

ここに榮えある記念式典を終え、奥井先生を初め歴代部長先生諸先輩のご苦労ご尽力に対して感謝すると共に、現役諸君の健斗を祈るものです。

思えば二十周年の我が部の歩みは、日本バドミントン界の歩み

NIPPON TIMES, TUESDAY, JUNE 15, 1943 KEIO UNIVERSITY BEATS Y.C.A.C. IN BADMINTON Collegians Make Clean Sweep In Singles Events Played At Yokohama Y.M.C.A.

Displaying brilliant form, the powerful Keio University badminton players ran roughshod over the Yokohama Country and Athletic Club Shuttlers in a match held on the Yokohama Y.M.C.A. floor on Sunday afternoon. The collegians from Tokyo made a clean sweep in the singles events, taking six straight matches besides annexing two of the three events in the men's doubles.

Sato, the No. 1 Keio representative, who incidentally rates as the leading player in Kanto, had little difficulty in turning back the Club's ace player, Captain Agajan, in straight sets by the scores of 15-6 and 15-5.

In both games, Agajan held the lead only to lose it when his opponent came up from behind to win handily with powerful placements and accurate drop-shots. "Bucky" Harriss, playing in the No. 2 slot for the Yokohama players also dropped his match in two sets by the scores of 15-5 and 15-11. Yamamoto completely overpowered his opponent in the first set but he met with stiff resistance in the second set and was fully extended to win.

Sau, the lany Keio No. 3 man played brilliantly to down Boixo in straight sets by 15-6 and 15-3, while Moritomo won from Eastlake 15-8, 15-3. R. DaSilva was defeated by Morooka 15-4 and 16-14, with the former making a game bid for the game in the second set. In this set, DaSilva led 14 to 12 but could not obtain the winning point and allowed his opponent to creep up to deuce and then take the next two pointes for victory.

Weiss extended Rokkaku to a 15-11 first set but he weakened to enable the latter to run out in the second by the onesided score of 15-4.

In the men's doubles, the Club's No. 3 combination of DaSilva and Boixo registered the only Club victory by takingba hard fought three set match from Moritomo and Morooka. The Club players started off strong and took the first set 15-12 but collansed badly in the second frame to allow the Japanese to win 15-6. The third and last set was a closely contested affair and a strong last minute drive enabled the Club players to take the set and match by a 15-13 count.

Another three set match resulted when Agajan and Eastlake were defeated by Sato and Orita by the scores of 15-13, 9-15 and 15-8. The Y. C. and A. C. pair missed a chance to win the first set when they led 14-13 but an error at a critical time gave their opponents the set. The Yokohama boys attacked strongly in the second frame and aided by Agajan's brilliant play they forged ahead and won the set by a 15-9 count. The third and final set saw the Japanese pair improve in their play with the result that they took the set and match by a 15-8 score.

Weiss and Harriss, the Club's No. 1 pair proved no match for Yamamoto and Sau who turned in an easy two set victory by the scores of 15-8 and 15-6. The Y. C. and A. C. boys showed flashes of brilliancy but on the whole their play was poor in comparison to the display turned in by their opponents.

The teams follow:

Referee: Yasui.

Keio: Sato (captain), Yamamoto, Sau, Moritomo, Morooka, and Rokkaku.

Y. C. and A. C.: Agajian (captain), Harriss, Boixo, Eastlake, DaSilva, and Weiss

昭和十七年四月廿六日午後九時半頃に横浜市中区元町の御園橋通りにて亡く
より既に二十年、全く光陰矢の如くとか、改めて過大をほしのひつ
つ今日のバドミントン部隆盛の為不斷の努力を傾けられた諸先輩
並びに諸先輩に祝詞を述べると共に後輩の諸氏と御同慶の意を表
するものであります。此所に私が入部してより卒業する迄の特に
終戦後の部の生立を記して何かの資となればと念じつつ記する次
第です。御承知の如く昭和十七年卒足當時は、バドミントン俱楽部
として誕生し、私達四人（星林、奥野）が当該練習所としてあつた
しYMC Aの横浜並に東京に於て入部練習したもので、私は主と
して東京YMC Aに於て当時全くの紅顔の美少年であった森友、
諸岡、仲地、山本の諸先輩より訓陶を受けたものであります。入
部以来幾日も経ずして有名なるスポーツ団体であった横浜YMC
Aと試合をなし、その後、昭和十八年に断髪令施行後、丸坊頭の
諸先輩と共にタイ国留学生との間に全くのデッドラヒートを演じ惜
敗した事は未だに新しい記憶として掲げられて居た日の丸ビタ
イ国国旗と共に思い出されるものであり、次に学徒出陣の為同年
暮に書後の練習をし、皆無事に帰還のみを心に念じてなごやかな
る中に淋しい一時を過し、夕暮の美玉代町の街角にて最後の別れ
をしたるものあり、此の時の森友先輩との試合も忘れ得ぬもので
あります。

終戦を迎えた昭和二十年は我部員間の安否を連絡し合つたのみに終り、翌二十一年春に戰後初めての合同練習をその後部の再建

にて過した食糧事情に運動する者特に何も知られて居らぬバドミントン部に入部するなど、張紙広告などでは思ひもよらぬ事でありました。此所に今後の再建にマネージャーとして活躍して戻れた中学より同級の三橋公夫君と共に部員募集並に練習所、資材の確保に務め広田氏の御厚意に依り横浜YMC A（旧YMC Aは進駐軍に接収）といつても現在の港中学の雨天体操場ですが、此所をホームコートとして二十一年夏より週一回の練習に入りました。此の当時の部員は約十二名位にて経済、政治学部の同級生と当时的専門部、獣医畜産の学生のみでした。一番困った事はやはり球の補給にて、当時は羽根が折れても全部大切に保存し、獸醫の学生が鶴の毛を持って来て呉れ此れを手分して羽根を植し直して縫めセメダインで固めて次の練習に使用したもので、球の鍾の部分を包む皮が破れてバランスが崩れた時に始めて廢品となり、この間二度以上は直して使用出来たもので一方服装はますますという所ですが、裸足で練習して居た者が多く足指先より血をだすことも多くありました。時勢柄、先輩の援助も無く唯練習場費と羽根代を補なう収入があれば上出来にて、一時は部員が絞出してキリンビール横浜工場にアルバイトに出ようと相談した事があります。

此の財政的苦難とは別に当時は試合相手が全くなく此の一十一
年夏に横浜YMC Aと戦後初の試合を公式にやつたのみにて、当
時の部を物心両面にて統一することは全く筆舌に尽き難いことで
した。昭和二十二年度に入り初めて広田氏の御活躍によりバドミ
ントン界も開拓され、神奈川県並に東京都選手権が昭和二十三年

「今の若い人に『十九歳の夢』は誰かの人も知らない。若い時はあまり小さな事にこだわらずに何でも行動する。その方が将来は人間的な渾みのあるスタイルの人としているよりな気がする。若者が若さを十分に発揮すること」例を挙げると、アルフのプレイで言うなら「曲っても良いから、思い切って力一杯カットバス、後の事はあとで又考えるぞ。」しかし一般的な世の中の事はそういうかない。何しろ幼稚園の入園でさえも試験地獄を経験し、苦しんでいる。これでは今後はたして若さを自覚し、若人の気概を持った人がどれくらい現れるのだろう。だから良くと言えば近頃の若い人は常識的に良くされているんだ」と。

そして私自身も若い人の部類に入るかどうか解らないけれど、自分一人のことで先の先まで悩み自分一人を引っぱって行くのがあくせくしている現状です。(二十七年卒業)

二 合 五 句

大塚伊二夫

現役時代の思い出などと、急に言われても学生時代は相当社会学の方面が一生懸命？　だったもので色々と、有り過ぎるくらいで何を書こうかと、まよつてしまつた。がハドミントン部に居た頃の思い出としては、予科時代だと思うが、華山に合宿した時だつた。

に開催され、藤井、広田、小宮諸君の名アーチャーの入部と共に各選手権にて必ず優勝をする慶応全盛時代が開かれたのです。此の気運に初めて二十三年に明治、立教法政に呼び掛けて関東学生バドミントン連盟を結成して、私が初代の委員長に成り、学基の地固めを始め、二十六年第一回の全日本学生バドミントン連盟結成並びに選手権大会が開かれたのです。

此の様に戦後ハドミントン界が今日の姿まで発展した隣には戦前より慶応が推進力として、又我が部の戦後の練習開始が今日のハドミントン界の隆盛を如何ほど早めたか、換言すれば隆盛の基礎は慶応にありと断言出来るものがあります。未算ながら広田氏並びに塾員兵藤氏に部の再建に一方ならぬ御尽力を賜つたことを改めて脚色申し上げます。(昭和二十四年卒業)

た わ い と

前田鑑二

当部も二十周年を迎へ御同慶に存じます。小生もOBの一員として当部が歴史を造つて行く事に心から喜びを感じております。ただ一抹の寂しさは卒足の優勝に次ぐ優勝の伝統を維持して行けない處にあります。そこで現役及びこれからの人方が本文を読んで精神面か、何かで若干でもプラスになれば幸いです。

小生、卒業後十年の余りも過ぎると、バドミントンよりもゴルフの方が性に合い時々出掛けでは年寄りと一緒に終日ゴルフを楽しむ

朝日新聞で「朝日はこれで倒産」と新聞が報じて朝
子たの胸うすい静の聲は私には大驚嘆しかつたものだ。
それで朝日となれど、すき胸に一定料の食料に行かく手帳
貰ひ分派は行かず四分か八分位だつた。同じ学生になつて、朝
日川、なじも同じ事だつたと思う。それで當時の聲の野口さへ
（多分そりだつたと思う）に食料増食を願つた。それで多少増や
してもらひそれでやまた不足だつたので、二食分の夕食を願
い、夕食にライスカレー付二合五勺の飯をベロリ平げ、他の東西
をあせんとさせてしまい、翌朝は食べられずに過し、これでお母
をうつから（金子曰べテデしまう）思った。

でも平気で過せた。でも程々に練習したせいもあつたかもしない。お屋にも食事で食べられず夕食迄通した。亦夕食のうまさは特別うよく感じた。

去年の事だったと思う。或る力士の家へ私用で行った時だつた。力士になりたてでは、朝二時か三時に起きて家の中の櫛除、兄弟子の朝食の支度、後片付けして自分達が食べる頃となるともう食べ物もなくなつて食べる事が出来ず、飯もぬきで後は稽古々々で夕方迄夕方に二合五勺どころか六、七合のチャンコナベを食べるそうだ。その方が体の為にもよく稽古も良く出来るそうだ。こんな話を聞いて、はあ俺の合宿時代によくまあそくりだと自分一人で悦に入ったものだった。今の現役はどう有るかは御無沙汰して居て知らないが、やはり俺と同じ様な思いをしてる者が居る様な気がする。(二十七年度卒業)

吉永增徳

私の八部は、塾内軟式野球サンダーラッシュに在籍中、兵藤先生に勧められ、部に昇格したばかりのバドミントン部に入部したのが私が三年になつた時で、御世辞にも新入とは云えなかつたが、昭和二十六年春の新人戦に出場したのが、私が始めてゲームを戦つた始まりで、早慶新人戦が一応勝負がついてからであつたが、身体の震えが止まらなかつたのを記憶して居るが、相手もインドネシアの留学生ソムノックだつたと思うが、スコアはファイナルセットの末破れたが、その後明治、法政の試合ではストレート勝ちを続けたが、この勝った記憶は意外に忘れて了つて居て想い出せない。

次の想い出は、一十七年の全日本学生選手権のトーナメント戦で、一回戦に勝ち、二回戦にシード選手の法政のエースで、名前は忘れたがサウスポーの人で、彼らから第一セット15-10の苦戦ではおまかれて居るが、結局ストレートで敗退した。

次はYMC Aの東京選手権(団体?)で、高見とダブルスで二位となつたのがやはり忘れられないが、自力の戦の想い出としては、余り華かなはない様だが、何と云つても最大の想い出と言えば、当部のリーグ戦連霸、特に二十七年は当部創立以来、最大で最強の記録樹立て、後にも先にもこの時位の華かな時代は無かつた。

全日本選手権を始めとして向う所敵なしで、全部のカップを独占した事と、そのバーフエクトの勝利を祝つて、塾長公舎で馬術

部と合同の祝賀会を開いて頂いた事と思う。

私は傍役として出席の際に浴した事は、最高の想い出であると共に、この栄を幅く為に努力した時の広田、小宮、前田各氏、及び現監督の岡君、吉原君、そして同級の高見君、岡崎君、そして当時の先輩諸氏の御蔭と思つて居りますが、部自身としては歴史が他部に比べ多少浅かつたし、色々の点では貧しかつたが、実力が最強だったと思ふ。

その点、現役諸君も最大の努力は払われて居る事とは思うが、
当時の貧しさから比べて恵まれた状況と思われるが、当時に比べ
て恵まれ過ぎて、何か不足して居る様だが、私のひがみだらう
か。

何はともあれ、先輩の栄光の歴史を高嶺の花として居ないで、その記録を塗り代えられん事を見部員皆忠に御願へした。

(二十八年夏家業)

内田専道

私が生れて初めて女性からサインを求められ、大いに喜び、大いに驚き、大いに困惑した、私にとってのためしいなつかしい一背前の思い出をお話ししさせて頂きます。

それはまだ各地でやつと熱意を入れはじめた頃でしたが、その中で特に普及の熱意のあった新潟市協会から指導に来てほしいとの招待に、大先輩の森友徳兵衛監督に引率され男女高校生、一般社会人と親善試合兼指導合宿という欲張った旅に出た時の事

10

我々が作成した所は、それも「静手」という細胞の
合宿にはもつてこいの古式ある文脈だけです。本車は田の
日に幼稚園の生徒に実演してみせた格子で、それにまじて
一層したのが、三重敷の部屋の中央にサッカリ穴を開けた様な
大きなドッソリした量敷のオトイレ、その中には立派な木舟あり、
タバコ盆ありでこれではゆっくり本など読みながら……と、そ
れこそお話を聞いた大名屋敷のもかくやかと思わせるものをそな
えた豪壮な建物でした。この結構なお寺の庭で、勤行の木魚の音
を伴奏に、当時小笠実業家として意氣衝天の餓のありました森友
監督の「気をつけ」「休め」「気をつけ」という顔に似合わない
(笑) 大号令で一日の日程が始まったのです。

合宿所から体育館までは毎日大型バスの送迎つき、会場にはベドミントンの愛好者であった当時のミス新潟が、女学生にまじって眼をかがやかせて、私共（いや私と思ったが）を、みつめているという非常に恵まれた合宿で、一同ミス新潟に大はりきり、日頃の3倍位のプレー、熱弁を振ったものでした。しかしこれも四日目位に、ミス新潟が彼氏と一緒に歩いているのを、丁度婚約のバスから見てしまい、「一同のしまげよう」といつたら。

とにかく無事目的も果たし、相互にそれ相応の効果をあげ、目出度く打あげとはなったのですが、その晩、地元のご好意で慰労会が催され、山海の珍味と名所にふさわしい銘酒がソラリと食卓を飾り、一同、では一杯とお鏡子に手を出そうとした時、監督さんが「解散する迄はお酒はタブーでござります」と明言されてし

れの扇の人が取ったのが、時代劇やおもてなしの扇で、山川の扇や横濱の扇のサインが書きたいのが欲しさです。この時は荷書きでしたので、手書きで、だらりと前を書き入れてしましました。上も下も書く、裏も見て絶対に心を残しつつ、荷物をまとめ次第に乗りこみ、はつだしで坐った所へ、どうやら女学生の一団が乗り込んで乗車したわざわざのお見送りと見ていると、その中の一人がやおらサイン帳を出し、監督さんにサインを求めているではありませんか。内心、森友さんのサインなんかもらってどうするのかなと思つたら、他の女学生までが部員の誰れ彼れとサインをねだり始めたのです。生来字の下手な私は、勿論サインの練習などした事もなく、新潟にまで下手くそなサインを残し、後生のさしきわりになると大変と、ソッとテッキの方に逃げ出して行きましたら、何とそこにまで追かけて来るではありませんか。そして立派な扇子を差出されてしまいました。いくら断っても聞いてくれず、ついにこれでこの扇子も使いものにならなくなるのに思いながらも、差出すその扇子にサラサラとサインしたのが、生れて初めて私のサインの顛末記でございます。ともあれ、今頃あの女学生は如何して居る事でしょう。あの扇子は翌日位にすてられてしまったでしょうが、この思い出は今も残つて居ます。

この思出で作る機会を貰えて頂いたのも、当時優秀な諸先輩が
都の名を天下に轟かしていくくださったからこそであり、亦私な

どが指導員として通用したよき時代でもあつたのです。二十周年の祝典を挙げるこの年に、史上初めてのリーグ5位を記録された事は、何んども皮肉な事ですが、栄枯盛衰は世の習、これを土台として、又天下に霸をどなえる様、現役詠兄弟の奮起を願いつつこのお話をどじさせて頂きます。(一九二九年卒業)

学生時代の想い出

石田裕

学園を出て既に六年目、社会人として多忙な毎日を送っている現在でもやはり学生時代の想い出はつい昨日の出来事の様に私の脳裡をかけめぐってくる。私は会社に於ては、販売関係の仕事をしているが、対人関係、販売目標達成等、スポーツを通じての豊かな生活がいかにプラスになつているか計算し知れぬものがある。

私が塾に入学したのは浪人生生活一年後の昭和二十八年、当時のバドミントン部は墨黄金時代を形成しており、連勝につぐ連勝、全てのタイトルを独占していた時代だけに私が入学した時の部員の張り切り満まきに天をつく勢いであつたと記憶している。

現在の私に学生時代の想い出は？と問はれてすぐ答えられるのは、やはり優勝をした時、全力を出し尽して優勝の栄冠を獲得した時だろう。

た。私は高校卒業の時に試合中左足アキレス腱を切断した為に極

レードに専心せざるを得なかつた。横川市人には、大いに感動し、悔しみ切つた体育館の中で懶度と吐き気をもよおした内野の投球があつたが、新コンピネーション実戦の熱に燃えじた。横川市人はくかばつしてくれる様になり、合宿後半には完全にアルスアレトヤとなり、むしろシンプルスフレードに弊害が起きるのではないかと心配した程であつた。私の足はオーバーワークのために前のように重く、幾度もけいれんを越こしたが私もやはり合宿後半ここは脚足出来る程に調整が出来上がつていた。

大会は私の出身地である札幌で開催されたが大会前の下馬評は相變らず立教組に高く、特に片石・加藤組は同じく地元出身であり、その張り切り様は目に見えていた。準決勝、佐藤・山崎と対戦し、私共は思いきって山崎君をアタック、集中打を浴びせたが特に相手を驚かせたのは越川君の勘の良い典型的なダブルスプレーであった。彼の長身を利してのフロントカットは相手のペースをすっかり乱し、圧倒的勝利を挙げた。決勝は昇り調子の片石・加藤組である。私共は前回と作戦を変更、逆に片石君をアタック。この作戦は全く相手の予想を外し、ゲームが進むにつれて片石組が乱れだし、一方加藤君の焦りが重なりミスを誇発させ、結局ストレート勝ちを修めた。私はこの時の優勝の感激は何回かの優勝経験にない非常に私の強い思い出となつたのは、結局私自身に打ち勝った勝利感であり感激であったようだ。私は社会に入つてからも幾度か苦しい立場に置かれたがその都度、その当時の辛かった経験、そして優勝の喜びを思い起して奮起する様にして

端にジャンプ力を失ない、又極度に左足の欠点を右足でカバーする為に脚力が非常に弱かつた。必然的に私はシングルよりダブル専門のアレーヤーの様な存在になってしまった。当時は佐藤、片石両君を擁した立教の全盛時代であり、塾は二位に甘んじていた。佐藤、山崎組の永年に亘る名コンビ、片石、加藤組の新進気鋭のコンビ、そして塾の越川君と私の組んだ私共のコンビは三巴の様相であったが、私共は立教の両コンビをどうしても破ることは出来なかつた。私は対戦することに色々の作戦を立て戰つてみたが、コンビネーションの点に於て立教組の厚い壁を破ることは出来なかつた。

私は秋の大学選手権を控えて、長野県浅間温泉地に於る合宿にて次の如き戦術転換を行なつた。立教は山崎、加藤というダブルス専門名アレヤーが居り、又佐藤、片石という全日本選手権保持者がコンビを完全にリードするという風に両者の長短所を上手に補っていた。その点私共は越川君が技術的に上昇しつつあると云つても、佐藤、片石両君のようにシングルスアレヤーとしてのダブルスプレーを行なう段階にまで至っていない。勿論、私もリード出来る力は不足していた。これでは対等に向つても私共の菲力ではどうしても勝つことは難しいと考え、私は思いきつて次の転換を行つた。即ち越川君をダブルスアレヤーにし、私がカバーした。今まではどうしても両者の立場が明確でなく、その弱点をつかれていたが勘の良い越川君が前衛となり、私がバックとなつた。然しここで問題となるのは私がバックになりきるために脚力の不足をどうカバーするかにかかるつてきた。私はチームのコンビ

私は口才の練習に於て最も心の燃田山幸作が「その結果を山中博士が指揮する講演会で、明確な方針を定め、そして自己アピールもとに實行に移行すること、組織的の貢献と個人的自負心を併存してゐる。これは講演時ににおいても同じ事が言えると思う。自己の欠点は何か？ 長所は？ そして方針は？ 那良金貴が實際的に練習方針を分析し、改善することによって、勝利、成功への道につながるものと思う。私はこの原稿を書きつつ学生時代を思い起こし、改めて明日への活力が湧き出てくるのを許りであるとしみじみ考えるのである。（昭和三十二年卒業）

広田先輩から宮永君まで

金坂俊平

私が塾大学のバドミントン部に入部したのは昭和二十八年でしたが、その年の春の全日本では、単でO・Bになられた広田先輩が優勝、藤井昂君が三位、岡先輩が四位、複では吉原先輩、藤井龍が優勝、岡先輩、石田君が一位と輝しい成績を挙げましたが、大活躍した石田君、藤井君が我々と同じ新入生だと聞いて、入部早々の私は塾のバドミントン部の強さに大変驚ろかされたものでした。

二十八年以前の記録を見てみましても、森友監督の下、全日本大学（団体）では第一回の二十六年、そして二十七年と二連勝、

関東学生（団体）でも二十六年の春に明治大学に一度優勝をうけられた以外六度の優勝と、文字通り無敵の強さを示して居ります。

その黄金時代に塾の中心として活躍なされた広田先輩のアレー
は、残念ながら私が入部した時には丁度O・Bになられたので実
際に拝見して居りませんが、記録をたどり、それ以後私の現役時
代を中心とした塾の選手の活躍振り、そして他校の有名選手等を
ひろって参りたいと思います。

広田先輩は全日本の単複に二度つつ優勝、全日本学生でも一十六年、七年の単複に二連勝、そして一十七年には全日本、全学生全関東の単複の全てのタイトルを握って居られ、優勝の回数からだけ見ても、その後現れた一流選手の追従を許さぬ大選手と申せましょう。

石田、藤井君の新人を加え全日本に好成績を納めた二十八年は関東学生でも吉原先輩が単で、複数吉原・藤井組が全日本に統いて優勝し、団体戦でも大いに期待されましたが、藤井君の病気欠場等で春、秋の関東学生、全日本大学と始めて立教大学にタイトルを奮われ、全学生でも単に立教の新人望月君、複数同じく立教の佐藤、山崎組とこれも始めて他校の選手に個人戦の優勝を取られました。

二十九年には一般の予想をくつがえし、この年から新たに監督になられた吹野監督の下、岡主将の活躍、そして新人越川君の殊勲の勝星で関東学生の団体に春秋連霸しました。入部以来始めて目の前に見た優勝の感激は今でも忘れられません。全日本大学で

しかし二十年のその他の優勝は、田代、柳原とも正解に算れました。又全日本の車では、岡太の上選手が優勝し、初めて岡西にタイトルを持ち帰りました。

三十一年は石田主将の努力もむなしく、全てのタイトルが立教のものとなりました。わずかに女子が高橋、佐藤娘の活躍により関東学生団体に優勝しました。

尚女子は翌三十一年の全日本大学の団体で準優勝し、塾女子部の名を挙げました。

全てのタイトルを独占した立教大学では、過去全日本、全学生の単のタイトルを持つ翌月主将の下、三年の片石君、二年の永井君が大活躍しました。片石選手はこの年の全日本の単複に優勝、三十年から全日本複に三連勝した堅実なアレヤー、永井選手はこの年の全学生、関東学生の単複に優勝し、三十二年から全日本の複に同じく三連勝した。その長身を利しての強打の持主でした。前述の佐藤選手と片石君、永井君、他校ではこの三人アレヤーが優勝の広田先輩に匹敵する優勝回数をもつ、印象に残った優秀な選手でした。

この様に私の最上級の年の三十一年は、始めて一つのタイトルも取れない不本意な年となり、私も副将という立場にありながら何一つ石田主将を助ける事が出来なかつた事は大いに責任を感じました。

翌三十二年も江井主将、藤井、越川君等の活躍で大いに健闘し

は、決勝で複2対0の勝勢から立教大学に惜しくも負けましたが個人戦の複では岡・越川組の新ペヤーが優勝しました。

岡先輩は全日本の複に二度、全学生の複でもこの大会で二度目の優勝を納めました。そしてこの年行われましたトーマス杯日本代表として大活躍し、最終の美を飾られました。

その他の個人戦では全て立教の選手に優勝を奪われ、この後立教大学の黄金時代を許す事になります。

他校の選手では立教の佐藤選手が、全日本の単で後輩の望月選手に決勝に敗れた以外は、この年のその他の単複のタイトルを獲得し大活躍しました。佐藤選手はどの大会でも常に一、二位を占め、O・Bになられてからも全日本の単に二度優勝し、現在も第一線で活躍中という安定したアレキヤーでした。

三十年には先ず関東学生の単に吉原主将が優勝しました。吉原主将は二十八年に全日本の複、関東学生の単複に優勝という輝しい成績を持ち、立教の佐藤選手の好敵手として、二人の剛と柔の対戦は单に数戦となりました。

札幌で行われた全学生では複数石田・越川組が優勝しました。石田君は札幌出身で、初期の全日本少年の単複に優勝した経験を持つ経験豊かなアーチャーで、塾に入つてからは常に今一歩の所で優勝を逃して居ましたが、地元で見事タイトルを握り、我々も北国の地で大いに感激を分ち合いました。

石田組を助けたパートナーの越川君は、十九年について全日本学生の複に二連勝し、塾に輝しい新風を吹き込みました。越川君は三十二年にトマス杯日本代表として活躍し、O・Bにな

竹林の下で、解平は、吉田さんとおれの娘の子の結婚式で、八分通り聞いた八重さんの振りの歌謡を作り、自分で先して頭歌を唄ひ入れ。選手の頭歌を唄うとび田野喜音のアイトに行くといふ事の出来なかつた事は、O・B・A・Hのむかうアントで涙をのみました。

しかし全力を擧げて戦った選手の健闘は大いに称され、特に過去に輝しい成績を持つ江井吉将、藤井玉緒の、幾多の解説を筆り越えて最後迄塗る為につくされた努力には頭が下ります。

豊場主将の下の三十三年、佐藤主将の三十四年と惜しくも優勝に見放されて居りましたが、三十五年には岡新監督の下、全日本大学に八年振りの優勝を遂げ、又全日本の複に中村・山田組が七年振りのタイトルを握りました。

そして三十六年には宮永君が、関東学生の年に六年振りに優勝し大いに気を吐きました。又、私が一年の二十八年から開始された早慶定期戦も、今年で十回目を迎えますが、現在迄の九連勝に終り、私も二年生の第二回定期戦より出場させて戴いて居りますが、両校の勝、負を放れた交換には、数々の楽しい思い出がつづいて居ります。

以上私の現役時代を中心にして、印象に残った選手、記録の数々を挙げて参りましたが、ここに挙げた人々の他にも、壇の為につくされた先輩の方々、輝しい戦績を収めた選手、隣の方となつた部員の人々、これらの人々の努力が壇バドミントン部二十年の輝しい基盤となって居り、最近は過去のすばらしい成績から見て

他校の後塵をあびて居りますが、今年の二十周年を一つの契機として、次の黄金時代を築きあげる為、O・B現役共に協力し、努力して参りたいと思います。(昭和32年卒業)

創部二〇年に際して

吉田格磨

当部は今年で二十周年を迎えるに當る事だと思っております。その間体育会に加入やらいいろいろ困難な問題もありました。しかし僕は何の苦勞もなく一応O・Bとして皆様と御付合出来るのも当部にいた御蔭だと思っております。

私は入部したのが二十八年の四月、早いもので当部に関係して九年になります。その間色々面白い事、辛い事(僕にはなかったが)がありました。しかし今考えると本当に楽しき思出が成っています。その中でも特に印象に残っている事があります。それは僕が二年生の秋季リーグ戦の慶應戦であります。ダブルスは京都のインカレで圧倒的勝利をおさめ、安心していたのですがシングルでは惨敗をしてるので選手は劣等感拭いさる事が出来ず、我々も一抹の不安を感じていたのです。ダブルスは岡・越川組、吉原・石田組が勝ち二一二リードをしました。しかしシングルのオーダーは、岡・山崎、吉原・新倉、越川・望月、小宮・佐藤、江井・片石、石田・力石、で四分六分で優劣の不利が予想された。しかし吉原さんの試合は圧倒的勝利を予想していたが、試合が始

まると思ひます。勝つ事が勝負の争う所でありますから、少しも平穏の力で将来の黄金時代に備立つと思ひます。特にレギュラー的な部員諸君の毎日毎日の努力が将来部の発展で、何ひやくても黄金時代に繋っています。僕も優勝した當時を思い出ししながら、これから先、三十周年、五十周年の記念すべき日を迎えた時、本当に部に籍を置いて良かったと思うように、出来るかぎりの努力をします。現役諸君も再び黄金時代の到来のために努力してくれるように望みます。(昭和32年卒業)

合宿生活の想い出

鈴木嘉明

一、先輩に叱られたこと。

昭和二十八年の夏も例年通りの酷暑が続いて居た。入部第一年の事で、バドミントンそのものにどうにか慣れて、半人前位シャトルを打てるようになった頃の夏休みの合宿であった。日吉のグランドのトレーニングも終り、いよいよ生れて初めての合宿生活に多くの期待と、一抹の不安を抱いて仙台へ向った。昼食後の休憩時間に仙台市内を見物する事が許され、又帰宿後も、午後九時迄は自由時間になっていたので、日中の暑さと練習の激しさ

まつてみると第一セットは取られ、第二セットもセットティングで二二〇となり絶対絶命のピンチであった。最早、負戦の一歩手前である。しかもサービスは新倉が保っていた。長いラリーが続きそして吉原さんがフォアハンドからのカットがネットの上に本当に乗った様な感じだった。もしその時シャトルがネットインしていなかつたら私の現役時代には一度しか優勝しなかつたと思うと今でも背筋が寒い思いがする。そして吉原さんは苦戦の末勝利を納めた。

続く越川一望月の試合は当時全盛期にある望月には正直に言つて、最高調の越川でも勝味はなかった。しかし上り坂の越川は第一セットを先取し(この時越川の精神力を見直した。あんなオットリした顔をしているのに)試合はやや、優勢に進んだ。しかし第二セットに入り望月はじりじり追い上げてきた。ついに越川は12-13とリードを計した。越川のサービス後、長いラリーが続き望月が越川のフォアハンドへの強烈なスマッシュをたたき込んだ。(当時望月のスマッシュは本当にたたき込むような感じがした。)ほんの少しまったくわざかであつたがラインアウトとなつた。その時の縦審は法政先輩の若林勝侯氏であった。僕は少し離れた場所で見ていたので、インかアウトか分らなかつた。しかし判定はアウトであった。その時の若林氏は目をつぶり本当に印象的で今でも忘れることが出来ない。当時、絶対の自信を持っていた望月はセットティングをやらないでサーブを保った越川は続けてポイントして、ストレートで勝つ。勢いづいた慶應は5-4で立数を破り優勝した。それ以後現役時代に優勝していないだけに

二、朝倉キヤブテンに叱られたこと。

朝倉キヤブテンの自転車の後を追い、市内の繁華街まで約十五分ほどランニングをした。日中の練習でへばつていたが、仲間が万一事故でも起したら大変と夢中であった。やがて世の中の男性であれば一寸心をひかれる様なピンクやブルーのネオンが灯る怪しげな路道にさしかかり、朝倉キヤブテンもひょっとするどこの辺ではないだろうかと、暫く待つてみたが、学生風情の者は見当らず仕方なく合宿所へ再び引返した。案の定行方不明の御両人は既に帰つて来ていたが、近所でヤキトリなどに舌づみを打ち、明日のスタミナの補強をしている間に門限が過ぎてしまつたとの事。その後は上級生の部屋へ呼ばれてシボられたらしい。翌日からの練習が又大変だった。今年の一年生はどんでもない奴がいるとい

うので、食事当番はもとより、体育館でも準備体操が終るとコートの周囲を兎跳び、ランニングを交えて十数回、それが終ると下級生係のS先輩や、日先輩がラケットを右へ振ると我々は走ってコックをレシートする構えをし、左に振ると左側に走り、へばりの来た頃に、O先輩先輩が二人ばかりで、我々は一人ずつコートに呼ばれ、倒れるまでレシートアスリーブを繰り返せられ、苦しいとか何とか言葉で表現出来ない位に訓練された。シャツは十分もすれば汗でビッシリで身体に吸いつき、やたらに喉が乾く。思い切り水を飲んだら最後、身体中クタクタになってしまった有様で、何と云つてもつらい練習であった。しかしその時我々の多くは、「何くそ、今に我々も上級生になつたらこの様な練習を下級生に出来るのだ」という気持で頑張ったので、最初の合宿参加者の大半は四年卒業迄楽しく部生活を送ることが出来たのだろう。

二、後輩を説教した事。

入部以来数多くの話題を残して昭和三十一年には我々が最上級生になつてしまつた。振り返つてみると意外に早く四年生になつてしまつた様な気がしてならなかつた。三十一年の合宿は以前一度経験した長野市郊外の、浅間温泉で行われた。当時は四年生と二年生が部員の三分の一を占める程で賑かだつた。合宿所が温泉場だけに話題も豊富だつたが我々は、夕食後の外出時間で水あづきを食べに行つたり、信州のそばを食べる事が樂しみだつた。狭い温泉町の事とて変化は少く、自由に遊ぶ程の余裕もなく、専ら食べ歩きであつた。或夜門限になつても二年部員が帰宿しない事があつた。我々四年生は帳場に坐り込み、違反者の帰りを今や遅

しと待ち受けっていた。そこへ十分ほど遅れて大勢の二年生が一緒に戻つて來た。我々は待つていましたばかり先頭のO君、F君に注意したところ、逆に「先輩の時計は進んでいますよ!」我々の時計では未だ門限五分前ですよ」といつて時計を見せた。まさかと思つたら何と四・五人が時計を計画的に遅らせて帰つて來たのだ。そして拳句の果てにそば屋が運かつたので帰りが遅れたなどと云い訳をはじめたから、我々は頭に來た。早速四年生の部屋に呼んで説教をと思ったらぞろぞろと、七・八人並んで入つて来て、数では我々と同じ位の頭数が揃つたので、敵も仲間が多く安心したのだろう。ニヤニヤ笑い乍ら入つて来て坐るやいなや「エヘ」と笑つた者が居たから益々我々はカッとしてしまつた。止むを得ず突然大声を出して怒鳴つたら流石に皆も驚いた様に静かにおとなしく下に向いてしまつた。ここでようやく我々も落書きを取り戻して、翌日からの食事当番、体育館の掃除番などを命じ、我々が交替で説教をした。我々も人數が多く、説教時間も長く、相手もだんだん悪いことをした様なムードになり納得して無事消灯となつた。

以上二つの想い出は、それぞれの間に四年間の時差があり、現在では既に一昔前の話にならうとしているが、今もつてバドミントン部生活の想い出の中にはつきり残つてゐる。失敗した事、苦しかつた事が人生にとつて忘れられない想い出となり、貴重な経験となることを体験し、将来にとつても楽しい話題となって残る事であろう。(昭和三十一年卒業)

部生活の想い出

回 卡

この回は塾の百年祭を記念して立派な体育館が出来、今年は山部の二十周年と最近は御茅出度練習です。これにリーグ戦等で優勝すれば文句のない処ですが、是非そうなつてもらいたいものであります。さて僕等が卒業してから早五年、部の生活も懐しく感じられます。その一つ一つが色々の意味で有意義な四年間であり、O・Bになつてからも何か離れがたいものがあります。それというのも先輩や後輩又同学年の者が互に励まし合い、又助け合つて來たからだと感謝しています。現役時代の僕等の学年は良いにつけて悪いにつけて何かと話題を尋ねられ、怒られたり咎められたり? しましたが、その為に割合に皆まとまつており、今でも東京の連中は月一回位集まつては色々と話に花を咲かせて居ります。これのものも個性の強い者同志が自然に詰め合つて、何か相通じる処があつたからでしょう。

うれしい事があつた時、淋しい時等誰からともなく電話をかけ合つたりしています。合宿生活では色々といだすらや失敗を繰返して来ましたが、その話はどれを取つても同学年の諸氏に関係がある事ばかりなので、次の機会にゆずりたいと思ひます。

さて今でも概してO・B連りを現役諸君がやつてゐる様ですが会社に行っても会えなかつたり色々と言ひ出しにくい事があつたりして大変苦労している事だと思いますが、僕等も三年の時に

山部では常に山部四年生の力で、八年間の山部生活は、山部の成績で山部を駆走していただきたいたが、せいか山部がそれから人気アーチーと相場が定まつていて、アイスホッカの時はあれ、三、四件も倒ると腹はガサガサ、胸はむかむか、また喫茶店に居る時は冷房がきいていて良いのですが、一度暑に出るとまともに日が当り、日がまわつてついに一人其かレングのビルの谷間でダウ、しばらく日影でしゃがみ込んでおこうかといった有様でした。(こんなことを云つて駆走していただいたO・B方には失礼ですが御許じ下さい) それでも頑張つて今度は帰留の方の先輩を御尋ねした処、「まあ御茶でも」といわれる所以又コトヒーでは大変と固く辞退いたしましたが、「まあつてこい」と云われる所以懶念してついて行きましたと、案に相違して氷アズキを駆走になつたので、やつと一人共助かつた様な気持で顔を見合せニヤリ、これがとてもうまかった事を今でも思い出します。はつきり何が飲みたいと一言云えば良かつたのですが、気が弱いためか大変苦労しました。今の現役諸君はその様な事はないと思ひますが僕もその後その点に充分気を付け様と心に誓いました。(昭和三十一年卒業)

「君はスポーツは何をやるの?」
「ハイ、バドミントンを少々」
「ア、あの女の子のやるスポーツネ」
「…………」
「西洋の羽根つきでしよう」

バドミントンに対する世間一般的の認識は大体この程度のものである。確かに羽根をつくには違いない女性向きのスポーツと云えないこともない。

然し。大学のスポーツとしてバドミントンを選んだ人は、真夏のギラギラ光る太陽の下でマムシ谷の石段を上ったりする激しいトレーニングや目の前がボートとしてコックが何処を飛んでいるのか判らなくなる迄先輩にしばられた合宿の練習の辛い経験を持つ人はかりだから、そういう人達にとつてはお世辞にも楽なスポーツとは申せまい。

僕は高校で三年間、大学で四年間（五年居タラオカシイ）部生活を送った訳だが記憶が正しければ公式の試合で勝った経験は一度も無い。いつも相手が勝つて居た事になる。

僕等昭和二十八年入学組は質は兎も角、量に於いては部の歴史初まつて以来の多人数で彼等がそのあふれるエネルギーを練習に向けてさえ居たら、全日本のランキングに一人や二人位は入つて居たかも知れないのに決してそれをしなかつた。合宿に行けば先輩の監視を逃れて焼鳥屋の屋台に首を突込み、練習が終つてお風呂に入れば女湯の境のタイルによじ登つて女湯をのぞき（註、僕

は風紀委員でしたので何時も彼等を取締る役目をしていました）。当時の監督の吹野先輩を悩ましたものである。そして合宿中遂に出し切れなかつたエネルギーはそのまま、第二次合宿、即ち親には一週間の合宿を一週間と云つて家を出て終了後或る時は軽井沢に、又或る時は天竜下りにと、一糸乱れぬ統制の下に行動を共にするのである。

四年生の夏休み、浅間温泉での合宿も終つた時、来年の今頃は皆新米のサラリーマンでとても旅行どころではないだらうから特に予定を立てないで気ままな旅をしようと相談がまとまり、取敢えず松本からの帰途のコトスも良しといふ計画天竜下りの船の旅とジャレ込んだ。周囲の景色は市丸姫さん歌う「伊那節」の文句そのままであり、天竜峡の宿でのビールも特にうまかつた。翌日豊橋に出て、東行の汽車に乗れば無事我が家に御帰還なのだがメンバーがメンバーだけにそろは行かない。反対行の汽車に身を委せて名古屋で下車。近鉄に乗り換えて一路志摩半島、鳥羽にコトスを見る。半島を一周して帰りは東京迄全員キセル乗車、駅に停車する度に車掌から一番遠い箱に乗り移つて検札を逃れた時のスリル……。

「バドミントンは決して楽なスポーツではない。激しいトレーニングと規則正しい練習があつてこそ始めて楽しめるスポーツである。」という事を書こうと思つて最初はペンを握つたのですがいつの間にか、亦次喜多道中記になつてしまつた。

練習は余りしなかつたけれど全国各地を旅できたこと、これが僕の部生活の唯一の収穫である。（昭和三十一年卒業）

私の秘密

件 件 下

「私の秘密」といふは大嫌物な物だ。周囲の人から離れて、周年記念文集に何か書いて下さいとのハガキを軽くい、久し振りに古い写真をひっくり返している内に、ふと、「私の秘密」めいた思い出が浮んで来た。

あれは昭和二十九年のこと、一年生になつて間もなく春のリーグ戦が終つた頃だつた。そのシーズンも目出度く優勝を遂げた我部では御祝いがてら部の懇親会も兼ねて現役、合宿の部内トーナメントを開くことになつた。丁度、新入部員もなんとかシャトルが打ち返せるようになって来たから、ひとつ試合をさせてやろうと、幹部の方々の思いやりも含まれていたのだろう。當時も女子は人數が少なく上級生の方々は組合わせに頭を悩ませたに違いない。私は木本明江さんと組み与えられた相手チームは御大の部長、奥井復太郎先輩、森友徳兵衛氏のペアだつた。これは大変、そつと聞いてみると奥井先生はまだバドミントンなさつたことはないらしい。しかし、と考えて木本さんと私はあの天現寺の体育馆の隅で頭をよせ合つてヒソヒソと、「森友さんはベテランだけど奥井先生はなさつたことないらしいから森友さんに渡さないよう先生だけ狙いましょうよ」と誠に失礼な作戦をたてた。さてコトトに入つてみたら作戦どおりは大ちがい。奥井先生はどうしてどうして、大奮斗なさつて上手に返球なさるし、後衛の森友さ

機をいくら考へてもどうしてあんなにありまわされたのかわからない。やはり大学の先生は偉いものだビショウを脱いたものだつた。

それから八年たつたが、その後奥井先生は塾長の席におつきになつて、白石先生を部長に御迎えしたし、当時のパートナーの木本さんは一年ほどで退部なさつたので、後にも先にも奥井先生七試合したことがあるのは私一人だ、と受けたのはタナにあげて、あえて「私の秘密」と題して書いてみた。

卒業後、奥井先生に御目にかかるのは、昭和三十五年の秋、京都三田俱楽部の会合が最後である。その後私は岐阜に移り、また御目にかかるのはいつのことやらわからぬが先生は以前、試合したことを覚えていらっしゃるかどうか、今度御会い出来たら一度伺つてみたいと思っている。

家庭に入って、もうバドミントンとは縁が切れたと思っていたら、主人が岐阜大に勤めるようになつて、いつの間にかバドミントン部の顧問にかつぎ出され、時折なにがしか寄附をしているらしい。所詮、縁は切れないとある。（昭和三十二年卒）

学生時代日記雑感

尾 関 守 弘

この所何となく現役から遠ざかって行くのを感じる。これは年々古きO・Bが感じるものかもしれない。私自身若さが無くなりファイトが無くなつた事はしたがだ。それを感じ出すと、三年の頃から必要にせまられてつけ出した日記を読み返す事に依つて、ファイトを無理に出させている。その中から一、二若き日の良き思い出の日を拾つてみよう。

32年11月1日金、日中W・K戦の記念ショッキを持ち歩く、ばてもいい所だ、夕方六時より幹部会員有り、女子をインカレに行かせる行かせぬでもある』レベル問題とか感情的に走り一応、三日決定をのぼす事になつた。この席上監督さんより明日の対関東は4年も出る事になつたと話有り、あれだけ3年以下でやると云つていて今日云い出した所をみると監督さんも気になつていたのだらう。初めから負ける氣でいるのが気にくわない。もつと自信を持ってと云つてはいたが内心では危ぶんであの様にうまく云い出して中止したのだらう。

32年11月2日土、今日の対関東は9-0で完勝した。福田がメンバーチェンジで中川に勝つたが自信がついたらう。昼の時間いだが昨日は江井さん等4年から豊場に2-3年じや危ないと圧力を掛だらしい主将の立場からすれば無理もないかも知れない。

今日監督さんが坊主になつてきた。一樣の決心じや出来ない事

だ、学生がなるのと違って家庭有り会社が有るのでだから。原因は何どすれレギュラー全員は価値がある。別に江井さんより坊主になれとの指示なし。夕方になって思つていた通りX君より電話が有つたがきつぱり坊主になつた方がすつきりしていいんじやないかな。これで4年がならなかつたら考えものだが越川さんの口ぶりじやなるらしい。だが伏屋さんはどうかな。それにしても初めバリカンが動き出した時はおかしい様な悲しい様な変な気持だった。どうも今日は初めに板垣の坊主頭が気になつたが予感がしたのも知れない。

32年11月3日、対法大6-3で楽勝、頭から取り巻たつ、伏鳥、松田がメンバーチェンジで出たが伏鳥気力なし、松田は、星野にだいぶねばつたがやはり実力の差、いかんともしがたし。大番狂わせ有り明治が関東に5-4で負けた。メンバーチェンジを見ると対関東の時、メンバーチェンジを落さなくて良かったと思う。今日僕等が見ていた様な気持でもし先日負けていたら見られたかと思うといやなものだ。明治も又坊主らしい(注、この時は、明治がならず法政がなつた法政の石井におかげでとばやかれた)。

32年11月22日金、午前中たいした相手でもないので屋島へ行った、今朝来た貴志さんと間々田、安川、野島の五人です。午後の対日大は3-0で楽勝。準決勝の対関大の試合で豊場が鬼神の如き動きをした。試合が終つた時の江井さんの嬉しそうな顔、多分一生忘れぬだろう。

準決勝対関大

W 豊	越	江	藤	S	佐	越	豐
場	川	井	0	竹	川	2	橋
(2-15)	2	(15-10)	0	(15-10)	2	(15-10)	0
佐	藤	竹	0	井	川	2	橋

豊場の試合本当に良く勝つたものだ。

第一セット、スタート良く4-0としたが次第に離された。

第二セット、13-6逆離されたが小刻みに13-13のショットそのまま5-0で押し切つた体力両方とも消耗している。

第三セット、8-1とコートチエンジを取られたが次第に追掛け佐々木は足がもつれ、両者疲労がはげしい、12-9。13-13。ついにおいついた、佐々木体力を考えノーチュース14-13となりドしたがチャンジサトア佐々木あせりサトアミス、豊場ロングサトアを上げ佐々木スマッシュ! 佐々木ひつかけ2位を確保す

決勝対立大

W	佐	藤	0	(2-15)	2	永	井	石	片	2	永	川	宮	澤	豊	場
佐	藤	竹	0	(4-15)	2	永	井	片	2	永	川	宮	澤	豊	場	
(5-15)	2	(7-15)	0	(5-15)	2	(5-15)	2	(5-15)	0	(5-15)	2	(5-15)	2	(5-15)	0	(5-15)

豊場は、男の立派な顔をして、豊場が、大柄で、力強い、頭も大きい。元々アリの豊場は、必ずしも、大事に育てられ、豊場からする事は、豊場だ。

33年3月4日火、今日本町に二子玉川に走つた。まきかん島でいたが、1金を用意していつたが軍富と高校生一人と監督さんだけが埼玉多摩川から電車を利用しただけだ。もつとぶれると思つたがよくついて来た。多分明日はだいぶへるんじゃないかな。それにしてもはてた多摩川二子、元住吉一日吉の間がばてた。最後の奴を拾うのも楽しさない(注、当時の監督吹野さんは日吉-多摩川二子玉川-多摩川迄現役と一緒に走つた。現役のトップクラスとせつていていたし、特に二子玉川から多摩川迄は電車に乗れる考え方のせいかすごく早く、ついて行くのがやつとだったのを覚えている)

33年3月5日水、今日行ってみたらほどんどぶれていた。入部以来初めて皆より遅れて走つた。走れば走れるが年になつたせいだらう。

33年12月8日日、体育館にて引渡しの為の具合を見たすばらしいものだこんな立派なのはない、せめて一年間でもバドをやつてみたかった。

33年12月15日日、本部にてたむろしコート開きへ対O・B戦をやつたシングル佐藤-佐竹ショウウ的価値はない。後でアメラクの

バスケットをやつた試合前腰打ち最低。フロートが少しする様だ。一般学生のハンドが最後に行なわれたが遊びだ。コートの使える来平の東野方法を考へて行うべきだ。

まだまだ有る。33年関東学生女子W1位2位アジア大会、久里浜の今昔百選記念パレードエトセトラ――

どうです。思い出しませんか？ 楽しき学生時代の思い出、パドミントン部にさも有れ！（昭和三十四年卒業）

福 田 竜 太

昭和二十四年卒業以来、僕は土建会社の現場勤務となつて、日本中の山々を渡り歩いて道路作りの様子に従事している。

山口県厚狭を振出しに、南は佐世保、北は北海道の白老の道路工事まで、ウクレレを持った渡り鳥だ。三十五年七月北海道・白老の工事現場にいた時は、慶応高校修学旅行団に逢い、ひっくりした。川上先生はじめ、高校バドミントン部の諸君ともゆっくり話し合えた。死ぬほど懐しかつたものだ。

今は和歌山有田川流域の工事に従事している。クラスメートの尾閥君から墨バドミントン部創立二十周年記念だから、何か感想を書いて寄越せと云つて来た。二十周年か、立派なものだなあーと思った。僕でさえ、こんなに嬉しいのだから東京に居る皆や、特に創立者とも云える森友先輩はどんなに感慨無量でおられるかと思う。僕は随分と慶應義塾の御世話をなつたが、憶えている事繰返し同じように頭の中に浮んでくることと云へば、高校一年よ

り始めたバドミントンの事ばかりおよそ勉強に関する想い出はさつぱり、まあせいぜい教師に怒られた記憶くらいしか浮んでこない。つまり僕の塾生活のほとんどは、バドミントンで勉強は部員たるの資格を維持する為篠箪しないように努力したいというようなものだった。しかも僕のバドミントンは傑出した強さであり、輝かしき戦績を残したこと云うのではない。試合に出る每一回戦はまあまあいけたが、一回戦以後は「御期待ニシエナイ」というよりも誰も「御期待」してくれなかつた始末だ。全国的にも強い我が部では、黒色の存在だったからかも知れない。ただ、試合にはそれほど弱かつたが、合宿とかトレーニング等、試合以外の集団活動では、うるささも熱意も一流だったようだ。僕の在塾中のアルバムは昭和二十七年より三十三年までの七年間の我が部の写真で埋まつて、まるで我が部の歴史を表わしている様である。そのアルバムを日本中の山を持って歩いている。寂しい時や仕事のうまく行かない時、聞いて眺める。それを聞いて眺めながらペンを取ると、懐かしさに頭が混がらかてくる。空と山と渓谷しかない。町まで數キロという工事事務所のベッドの中で、クロウや仏法僧の鳴くのを聞きながら……。塾中等部出身の僕は、その頃中等部にはバドミントン部がなかつたので、高校に上つてから初めてバドミントンをやつた。たまたま大学の方は部の黄金時代だったらしい。高校部の実力は、試合に出るたびにあつというまに負けるという可愛いらしさであったが、合宿とかトレーニングが大学の人達と一緒にたのが素晴しかつたのだ。その厳しさとやら、何度止めようかと思ったか分らないくらいいた。しかし、こ

8

辺境の地に行くにつれ、僕がどんなに部を懐かしく思い、部に感謝しているかということを一部の人にでも知つて貰いたかつた矢先、部誌を出すから何か書いてくれと云われ僕の気持は感慨無量にに溢れた。

今日も又ダイナマイトの音を聞きつつ仕事をしている僕にじつて、十年後二十年後もどんな所で何をしていようとも、このような企てには喜んで参加させてもらいたい。(昭和三十四年卒業)

丸善舗道株式会社 有田川作業所勤務

部創立二十周年に思う

野鳥義

下三ノトノ都創立以来二十年、毎年先輩と後輩が送迎される

入部したその年の夏にインター・カレッジが、又般学生の東日本選手権大会が札幌に於いて開催されました關係上、非常に多く懲りる次第です。

一年の時の札幌遠征メンバーは吉原、中村（頼人）石田江井、藤井、越川、豊場等の各先輩が活躍され、特に石田、越川組のダブルスが前年（岡、越川組）に引続いて加藤、片石組（立太）を破り二連勝した年度でありました。

石田先輩の家にて祝杯を受ける石田先輩の満足気な顔、御家族並びに遠征部員一同の喜びに溢れる笑顔が今でも思い出されます。

又吉原先輩が、この札幌の試合に於いてロマンスが生れ、その後御結婚なされたという二重の喜ばしい事も補足致します。試合日程が終了しても石田先輩の家に全員御世話になり昨日は月寒牧場、今日はリンゴ園、明日からは阿寒湖と札幌市、内外を集団で出張したものでした。その後、幾度びもの遠征試合、合宿等に於いて常に他校より羨やましがられました。と云いますのは現役諸君も既に経験された人もいるでしょうが、非常に要出身の先輩上

9

り励まされ、歓待されるからです。このことは小生自身、卒業してみますと非常に簡単なことであります。が実はなかなか実行出来ない事柄であります。

塾体育会バドミントン部に入部して良き先輩、良き後輩に指導された苦楽と共に過した幾年月、現在実社会に仲間入りして早や二年を過ぎて部生活において味った種々の事柄が小生にとつては非常に役立つてゐるし又小生自身も誇りとして居ります。

この上は今日より明日への前進にO・B、現役一致団結して塾及び部発展の為精進努力しようではありませんか。

五月十一日 札幌にて 昭和三十五年卒業

我々の時代の想い出

小杉良雄

塾を出てから早や一年目を迎えた今、短かかった体育会の厳しい生活を思い起すことに忙しい中にも楽しい事である。我々が新兵(一年生)の時代はキヤアテンは江井さん(当時は一番恐く感じました)、マネージャーは藤井さんであり、同級生は一十五六名近く居たと記憶します。練習はまだ体育馆が無かつた為天現寺の幼稚舎の体育馆を借りて、五時半より八時半迄、週四回行われわざわざ日吉から通つたものです。電燈が暗くコートが一面、(ほとんどレギュラーが使用)しかねない上まわりでシャトルを打つ場所がせまかつたので一般部員はそこを取り合つて打つていた

ものでした。がもつぱら一年の時は幼稚舎の運動場をブルブル回つたり外に出て上級生(主に福田さん、尾関さん)の後についてかけまくつたものでした。今その辺を通るとなつかしさがわいてきますから、なんとなく無駄ではなかつた様です。(トレーニングの時走った東横線鶴島→多摩川間も同様の思いです)そして春秋リーグ戦とも成れば神田国民体育馆で大声をはり上げて味方に選手に応援する、という様な具合でした。我々が一年になつてからはキヤアテン豊場さん、マネージャー尾関さんでしたがすでにこの時には同級生は十名位に減つてしましました。止めた者の理由は色々あつたと思われますが、その時はちょっと淋しかつたです。二年の時の部生活もほどんど一年の時に比べて大差はなかつたと思いますが、私はもはやバドミントンの魅力に取付かれて止められなくなつてしまひましたし、下級生が入つて來たので彼等に負けね様、よけい一生懸命やる様に成つたと確心しています。三年の時代はキヤアテンは佐藤さん、マネージャーは野島さんで我々もはや上級生、何かと雑用が増えはじめたものでした。しかしこの年から日吉に百年祭の記念事業の一つとして記念館(体育馆)が建てられたので、ようやく自分達のコートが持てる様になりました。(バドミントン部の練習は同館の中央、右側がバスケット部、左側が器械体操部が練習することになりました)コートは横に三面どれたので、一般部員もコートに入れる回数が多くなるし、又コートのまわりで自由に練習が出来る様になつた訳です。かくするうちにいつの間にか、我々も最上級生の年を迎えました。同期で最後まで残つた者は、男子、高井、松田、重富、山

中間に横断り転倒、中村は左腕骨折、中野は右腕骨折、中野の力も弱くて少しも走れないもので中野は横浜市立中学校が工度昨日の事の悔しさなりませが、中野の腕骨折は最高級生にレギュラーがいなかつたのでその悔しさを嘆息しておいたが、下級生諸君はよく自覺し頗張つてくれたと感謝しています。

我々の学年には仇名がよくついていまして高井はネコ、ホコリサギ、メガネネコ、松田はキンチャン、重富はホイキタ、マカリ山中はアヒチ、ベビーギャング、瀬戸はエビ、探險隊員、原野は豆タック、カントクサン、小生はキトーン、中村さんは〇〇カバ、隅田さんはケロ、等です。特に高井、重富の横浜コンビ、瀬戸、山中の学年コンビは……でした。(失礼)考えれば小生等も学年が進むにつれてだんだんとしまらなくなつていつたことも確かですが、……

さて我々が四年の時の戦績をちつと振り返つてみると、春のリーグ戦が四位、秋のリーグ戦が三位、そして女子が創部以来初めて二部に転落したこと、横浜で開かれた全日本選手権でダブルスに中村・山田組が七年振りに優勝したこと、大阪で開催されたインカレで実に八年振りに優勝をもたらした事等です。特にインカレに於いて、準決勝对立教大学戦において複一のあと、單で中村が小宮を破り、山田が板垣(弟)を破つて決勝に進み対法政大学戦に於て、同じく複一のあと、宮永がアルセツティングの大激戦の末、星野に勝ち、又中村、山田も小田・富田をフルセットの末下して榮えある三度目の全国制覇をなしとげたあの瞬

間は、子供の頃の夢が叶つた喜びで、胸が熱くなつて涙がこぼれました。胸が熱くなる胸に手を添えて握ります。小生はうそいたゞくお仕事やかも知れませんが「最高学年で優勝を成し得て卒業させてくれたこと」この時ほど本当にバドミントン部に入つていて良かったと思つたことはありません。

自分自身この四年間の体育会の生活でうれしかつた事と言えば、①インカレで優勝出来た事、②早慶戦にシングルで一勝を上げたこと、③一応マネージャーとしての自分の責任をはたし、後輩岡野にその任をゆだねた時、④合宿でのさまざまな生活等であり、又つらかつた事と云えば①トレーニング、合宿等でしばられた時、②マネジメントが行きすぎた時、(幸い打開出来ましたが、)③受験生が他校の様に思うように入らなかつた事等です。

下級生の時はいろんな面で上級生に不満を持っていましたが、自分が上に立つて初めてその難しさが解り、途中で折れてしまつては四年間通した体育会の生活を送らなければ、スポーツマンの根性をつくる為にも、眞の団体生活を送るためにも無意味であると思います。小生自身四年間通した部生活を送つたが故に、立派な先生方、先輩方、そして愉快な話し合える友人、後輩にめぐまれた事を幸福に思ひ、これから胸を張つてO・Bとして社会を渡つていけることは楽しい事です。

更に一層の部発展を祈つてとりどめない筆を置せていただきます。『部創立二十周年、御賀出度う御座居ます。』

(昭和三十六年卒業)

部 生 活 雜 感

松 田 均

卒業して早くも一年目、気軽な？ サラリーマン稼業もどうやら板について来た今日この頃ですが、今年は当部の創立二十周年に当る意義ある年にあたつて雑感を一文。有益な忠告や思い出を諸先輩が寄せられる事でしょうが、僕は二年浪人した後入部しいつの間にか不本意な部生活を送つてしまつたにがい経験がありますので、卒業した今でも長嘆息を禁じ得ない僕の轍を踏んでいただきたくない為に敢て体験を通しての忠告を試みてみます。

苦しい受験生活に別れを告げ夢にまで見た慶應義塾、僕も今日からKOボトムだ。さあハリキッて又バドミントンをやろうと誰でもが勇んで入部して来る事だろう。自分は高校はあれだけやつた実績があるのだし少し位のランクはすぐ取戻せるさ、と云う自信に満ちて僕の場合も心の一隅に自信とも過信ともつかない安易な気持が有つた事は優い隠すべくもなかつたがハリキッていたのは確かです。とにかく浪人を経過して入部して来ると上級生は芳労のあまり「君はバドミントンから遠ざかっていたのだし焦らずじっくりやるのだな。」とやさしい言葉をかけて下さるに違ひ

ない。辛い練習でもとかく甘くみてくれるだろう。練習をやつてみると考えていた程球も走らず身体もガタガタしている。こんな筈ではなかつたのに不安になる。この辺が一番問題のポイントになる所です。ここで「考へてみれば或る期間ランクが有つたのだからうまいかないのが当然なんだ。徐々に体調を整えて気長にやるさ」と、「さあ大変だ。今後は人一倍練習に励み早く皆のレベルまで行く様努力しよう」ここが充実した部生活を送れるか否かの分岐点になっている様に思えてならない。僕は先輩の含蓄ある芳りの言葉を甘受してしまつた前であつた為にいつの間にか一年が過ぎ二年となり焦りに焦ったあげく「はつ」と思った時はもう卒業と今考へても悔まれてならない過程を経てしまった。こんな時は強固な意志の持主でなかつた僕はつい麻雀はじめ学生が経験する甘い誘惑に手を出してしまつたと云えば言証がましいだらうか。とにかくあの時はもつと練習を一生懸命にやつておけばよかつたなあとつくづく後悔される。ここで一年目勝負説を強調したい所以である。浪人であれ何であれ、或るプランクを経て入部して来る諸君は、自分は相当のハンディを背負つているのだからよほどしつかり練習をしないと立派な満足のいく部生活を送れないんだということを肝に銘じていただきたい。勿論自己の体調も考えずに無茶になれと云う意味ではないが……。こんな事ばかり書くと灰色の塊みたいな生活を送つたと感想されるかも知れないが楽しく良き思い出も多々有つた。あの苦しかつた蛇谷のトレーニング、もう十回目だからこれで最後だろうと高をくくつて頂上まで駆け上つたと思つたらおもむろに「ラスト二回！」の

二子玉川園までのロードワーク、多摩川大橋の土手まで来ると嵩か彼方にゴルフの橋がかすんで見えるのだが走れども走れども近くはならない。あれは震気楼ではないのかどナンセンスな事を考えながら走つた記憶がある。

その当時監督であられた吹野先輩が我等と同じペースで完走されたのにはいささか驚かされた。人間やる気があれば出来るものだと云う貴重な教訓を教えて下さつた証であるが、さぞや御苦しかつたであろう。吹野先輩といえば忘れることが出来ないことがもう一つ。それは例の坊主事件。あれは確かほくが一年の秋のリーグ戦で法政に敗れた翌日の出来事だったと思うが、試合前の準備体操が終つた頃、粹なソフトをかぶられた先輩が御見えになつたので、「今日は！」と掛けをしたらおもむろに帽子をお取りになつて会場を返された。ひょいと見るとあるべきところにあるべきものが無い。一瞬もう駄目だと観念した。(その吹野先輩の心意にも応える事が出来なかつたのも残念に思われてなりません)。案の定試合後江井キャバテンからレギュラーは明日まで坊主になつて来る様に通達されたので泣くに泣けず愛すべき毛髪とおさらばした証だが案外さはさばして気持ちが良いし、第一手入れに要す

とにかく苦しくもあり、悲しくもあり、懲しくもありの部生活

も四年間無事に過ごせた事は恵いやりある諸先輩、うるわしき友情を發揮してくれた同輩の御陰と感謝の気持一杯です。今後は伝統ある塾体育会バドミントン部のO・Bの一員として微力ではあります、が、部発展のためにせいぜい努力する事を御約束すると共に、一日も早く第二の黄金時代の来る事を祈つて止みません。

どうか現役諸君頑張つて下さい。(昭和三十六年卒業)

山 中 武 一

社員は吾が社の社長程ワマンはいないと思うであろうし、又一、二年の部員は体育会の中で我部ほど封建的な幹部はいないであらうと思うであろう。しかしそれで良いのだ。卒業し学生時代を追憶する時、部生活の思い出以外に何が残るであろうか、特に苦しかつた時代を回想するほど愉快なものではなく、そこに又自己の成長を見出すのである。勿論、楽しい思い出が多いに越したことはないが、快なり最終学年の全日本優勝、これは下級生の手を

てくれた最大の贈り物であった。慶早戦に初めてアトランションではあったが良き伴侶？である海老様とダブルスに出場出来たのも又快なりである。しかし大半の想い出というものは、学連群しく云えば関東学生バドミントン連盟の中につきる。大学二年の後半から中立地帯の学連に出向し、上級生になる過程を部外で生活したということは誠に不幸であった。部から遠く離れたものという意識が常にあり、部に帰ってはかなりの劣等感を抱いていたことは確かであったし、久々に練習に行って「又新生が来た」とでもいいたげな下級生の眼に会うのが一番恐ろしかった。これが又練習に顔を出せなくなる一因にもなつた。O・Bになつてからも未だその感情が抜けないのは如何ともしがたく、日吉には顔をださなくともお茶の水へは気軽に行ける自分に寂しく感じる時さえある。このような具合なので我部にどつては大愛しい先輩であると創部二十周年にあたつて十分反省し、良いO・Bに成るよう心掛けるつもりである。

先日森友大先輩が「日経」の交遊抄なる欄にバドミントン一筋に生きる喜びを書いておられたが、部活動に於ける友人関係ほど嬉しいものはない。私も卒業後一年、この欄をお借りして同期の方々に呼び掛けたいのだが、如何であろう。「高井君以下同期の方々よ、半年に一度くらいは会おうではないか、御連絡をどう？」

それはさておきかような訳で、私事山中武一は伝統あるバドミントン部に塾高から数えて七年間も寄生していながら部に尽していることは何もない。学連に於いても部に尽力したとはお世辞に

すぎないが学連の想い出は楽しい。ます創造の楽しみがある。各地方への出張旅行がある。およそ学生とは遠くかけ離れた生活を味わつたものだ。後輩諸君！浜野、福田、そして平林諸兄に統け（昭和36年卒業）

部創立二十周年に寄せて

主 将 宮 永 武 司

日本に於ける最初の大学バドミントンチームが慶應義塾に出来てから今年で二十年目を迎える事は我々部員一同非常に誇りに思つております。バドミントンが比較的我が国に於いては新しいスポーツであるという事を考へると二十年という年月は決して短くないと思ひます。しかも日本の指導的先駆者としての我部の過去は我々現役から見ても素晴らしい一語に尽きると思われます。この様な立派な部に所属させていただきております部員一同は先輩諸兄の輝かしい歴史を傷つける事なく、いやそれ以上の発展を見せるべく日夜努力を怠つてはならないと思いつつ練習に励んでおります。しかし現状は過去に照らせば明瞭であります様に低落気味の感をまぬがれないので何とかこの二十周年を機に黄金時代の再度の到来を実現したいと思ひます。建物に於いて基礎工事が大切である如く、急激な発展を望む事なく日本に留まる事なく広く世界のバドミントン界に誇るに足る部として発展させたいと思つて

昭和37年度 部活動報告

- 4月3日～8日 春季会館
於大邱市スポーツセンター
- 4月22日 O・B 対現役選手試合
於日吉記念館
- 4月29日～5月3日 レギュラー合宿
於日吉記念館
- 5月8日～12日 関東学生新人選手権
於国民体育館
- 男子 复 藤・山本組が4位に入賞
- 5月14日 新入生歓迎会及び定期総会
於東機会館
- 5月20日～27日 関東大学春季リーグ戦
於日本女大体育馆
- 女子 塚 4 1 埼玉大
- ” 5 0 明学大
- ” 4 1 杉野短大
- ” 2 3 日女大
- ” 4 1 千葉大

さて現在の我部の状況を一寸書いて見ますと、今春のリーグ戦で一勝四敗という成績に終りあわや最下位かと思われましたが、やつとの事で五位になり、創設以来最悪の事態に直面しております。理由をつければいくらでも云い訳を言えるとは思いますが、我々としてはどもかく結果だけを見、負けは負けである事に変りはないのですから、来たるべき秋のシーズンには春の巻返しをと思つております。最後に我部が、部員全體の一歩前進を、さらに先輩諸兄ともども努力して再度全盛時代をつくり上げる日の近い事を祈りつつ筆く事にしますが、同時に今日ある部の為に築くなり日本になりお尽し下さいました方々に御礼を申し上げま

以上の結果4勝1敗で第2位となる。

○5月21日～28日 関東大学春季リーグ戦

於品川体育馆

男子 塙 3 1 6 立大

" 3 1 6 法大

" 5 1 4 早大

" 3 1 6 明大

" 2 1 7 中大

以上の結果早大と同率位となり5位決定戦を行う。

塙 5 1 4 早大

○6月11日～16日 関東学生選手権

於国民体育馆

男子車に於て宮永三位に入賞、男子複に於て鈴木・田中組入賞

ト8に入賞

○6月17日 三田クラブ主催ダンスパーティ

於産経国際ホール

○6月24日 O・B 対現役親善野球大会

於網町グランド

○7月3日～12日 夏季トレーニング

於日吉陸上グランド

○7月19日～25日 夏季合宿

於日吉記念館

○8月2日～5日 東日本学生選手権

於札幌

以上の結果3位となり、一部転落を行った。

塙 2 1 3 埼玉大

この結果一部転落

○10月28日 体育会創立70周年記念式典

於日吉記念館

○11月2日～9日 インターカレッジ

於仙台

男子団体戦

二回戦 塙 3 1 0 福岡大

準々決勝 " 3 1 0 関学大

準決勝 " 2 1 3 法大

三位決定戦 塙 3 1 2 中央大

以上の結果3位入賞

男子車に於て宮永優勝、男子複にて轟・山本組6位に入賞

○12月8日 総会兼納会

於東機会館

以上

創部二〇周年記念後記

久米 融

今年一月二六日O・B会に於て創部二〇周年記念行事を行うことに決定した。

男子車にて宮永優勝。鈴木7位、両名とも東西対抗出場権を獲得。

○9月9日 部創立20周年記念式典。模範試合。祝賀会。

○9月16日 早慶定期戦

於早大記念会堂

O・B 塙 3 1 4 早大

女子 " 0 1 3 "

男子 " 8 1 7 "

○10月16日～21日 関東学生秋季リーグ戦

於国民体育馆

男子 塙 4 1 5 法大

" 4 1 5 明大

" 3 1 6 立大

" 4 1 5 中大

" 5 1 4 早大

以上の結果第5位となる。

○10月20日～27日 関東大学秋季リーグ戦

於日女体育館他

女子 塙 2 1 3 千葉大

" 1 1 4 明学大

" 2 1 3 杉野短大

" 1 1 4 昭和女子大

" 1 1 4 日女大

以上の結果3位となり、一部転落を行った。

翌三月一日に早くも第一回の委員会が開かれ、行事の内容を協議したのでありますが何分にも十周年の記念行事をやつておらず又他にも前例のないことと、その規模、形式がわからず、結局調達可能な資金に応じた行事をすることに致しました。以後ほぼ毎月一回多い時には二回といったように委員会を開いたのであります、先輩の皆様には御仕事の忙しい中を度々御出席下され、卒業後数年以上経っているにも拘らず都に対する熱意と深い愛情は誠に感激に耐えないものがありました。

苦心談といいますと、先に述べましたようにこのような企画はこれまで例の無いことなので、その規模特に招待者名簿を作成するのに骨を折りました。始め招待するしないは別として一応関係者を選んだ所百五十数名にのぼりましたが予算の関係上極く内輪にということで五十数名に落きました。記念品の選定の場合もそうでしたが、何でもこなすことをするから予算はこれだけ必要であるというのではなく、みみつらい話かもしれません、予算の範囲で最上の式典をという訳で皆さんの計画をたいぶ制限したようでした。

又当日の式次第及び招待者の配置には気を使いました。式次第の方は後に行われた慶應義塾体育会七〇周年のそれとほぼ同じで

したのでほつとしました。席配置についても部長先生に御相談した事が良く当日恥を搔くこともなく済みました。部長先生の御話では、その事については奥井先生にも大変御心配下さったと承っております。

又資金については、O・Bの皆様も大変だったことでしょう。今度は二〇周年とペアティー、そしてO・B会費といったように財政的に多大の御負担をおかけした事とお詫び致します。又その集金にあたった諸君も定めし苦労したことでしょう。始め私は彼等にその交通費、通信費の一切を自己負担でやつてくれる様にどうのきました。つくづく自分の非力を惜けなく思いました。それにも拘らず、皆がよくやつてくれ予定の九〇%以上の集金率を挙げる事が出来ました。

この様にO・Bの皆様、現役各員の努力により、当日の式典は和氣あいあいの内に無事に終つた次第です。又決算の方も四万円の黒字という好成績で部誌編纂の方に役立ちました。

私個人としては、この行事を通じて諸先生並びにO・Bの皆様方と緊密な接觸の機会を得られ何かと大変勉強になりました。

二〇周年記念責任者として根本君と共にその責を無事遂行出来ましたのも偏に皆様の御支援御協力の賜と深く感謝し、厚く御礼を申し上げる次第である。

(慶応義塾体育会バドミントン部の一層の発展を願つて)

一九六一年十二月十六日 深更

あ と が き

安川通夫

慶応義塾体育会七十周年と共に我がバドミントン部も二十周年を迎へ、九月にその記念行事が行われた。

日本のバドミントン界を常にリードして来た我部がそれを記念して本誌を発行する運びとなり部関係者並びに先輩各位の御協力を頂き深く感謝致して居ります。

部誌発行の計画は前々より一部先輩の間で話がありましたが実現されず現在に至つております。部の歴史を知つて居るのは一部の人のみで、各々の現役時代を中心にして知らないのが現状ではないかと存じますので本誌を通じて皆様に我部の歴史の概略を知つていただきたく思い編集してみました。

部誌発行は定期的に行なう計画がありますのでぜひ続けて頂き先輩各位、現役各位の結果を図つて頂きたく存じます。

尚戦績を本誌に記載する予定でありますがあまり費用との他の点で掲載不能となりました事をお詫び申し上げます。戦績は大部分整理が出来て居りますので引き続き発行される部誌に掲載して行きたく計画致して居ります。又不慣れの為発行が遅れました事を深くお詫び致します。

部誌発行に御協力頂きました各位に重ねて御礼申し上げますと共に今後共皆様の御協力と御指導を御願い申し上げます。

■ 編集責任者 尾閑 守弘 ■ 慶応バドミントンクラブ	■ 表紙デザイン 谷工画堂 ■ 印刷 慶立印刷
なお部誌作成に当つて諸先生、先輩各位の御協力に厚く御礼申し上げます	